

硝子戸の中

夏目漱石



一冊堂青空文庫

硝子戸の中

夏目漱石

—

硝子戸ガラスどの中うちから外を見渡すと、霜除しもよけをした芭蕉ばしやうだの、赤い実みの結なった梅もどきの枝だの、無遠慮に直立した電信柱だのがすぐ眼に着くが、その他にこれと云って数え立てるほどのものはほとんど視線に入って来こない。書齋にいる私の眼界は極きわめて単調でそうしてまた極めて狭いのである。

その上私は去年の暮から風邪かぜを引いてほとんど表へ出ずに、毎日この硝子戸の中にばかり坐すわっているので、世間の様子はちつとも分らない。心持が悪いから読書もあまりしない。私はただ坐ったり寝たりしてその日その日を送っているだけである。

しかし私の頭は時々動く。気分も多少は変る。いくら狭い世界の中でも狭いなりに事件が起つて来る。それから小さい私と広い世の中とを隔離しているこの硝子戸の中へ、時々人が入つて来る。それがまた私にとっては思いがけない人で、私の思いがけない事を云つたり為したりする。私は興味に充みちた眼をもつてそれらの人を迎えたり送つたりした事さえある。

私はそんなものを少し書きつづけて見ようかと思う。私はそうした種類の文字が、忙がしい人の眼に、どれほどつまらなく映るだろうかと懸念している。私は電車の中でポケットから新聞を出して、大きな活字だけに眼を注いでいる購読者の前に、私の書くような閑散な文字を列べて紙面をうずめて見せるのを恥ずかしいものの一つに考える。これらの人々は火事や、泥棒や、人殺しや、すべてその日その日の出来事のうちで、自分が重大と思う事件か、もしくは自分の神経を相当に刺戟し得る辛辣な記事のほかには、新聞を手取る必要を認めていないくらい、時間に余裕をもたないのだから。——彼らは停留所で電車を待ち合わせる間

に、新聞を買って、電車に乗っている間に、昨日きのう起った社会の變化を知って、そうして役所か会社へ行き着くと同時に、ポケットに収めた新聞紙の事はまるで忘れてしまわなければならないほど忙がしいのだから。

私は今これほど切りつめられた時間しか自由にできない人達の軽蔑けいべつを冒おかして書くのである。

去年から欧州では大きな戦争が始まっている。そうしてその戦争がいつ済むとも見当けんとうがつかない模様である。日本でもその戦争の一小部分を引き受けた。それが済むと今度は議会が解散になった。来るべき総選挙ききたは政治界の人々にとっての大切な問題になった。

ている。米が安くなり過ぎた結果農家に金が入らないので、どこでも不景気だと零こぼしている。年中行事で云えば、春の相撲すもうが近くに始まるうとしている。要するに世の中は大変多事である。硝子戸の中にじっと坐っている私なぞはちよつと新聞に顔が出せないような気がする。私が書けば政治家や軍人や実業家や相撲狂すもつきょうを押し退のけて書く事になる。私だけではとてもそれほどの胆力が出て来ない。ただ春に何か書いて見ると云われたから、自分以外にあまり関係のないつまらぬ事を書くのである。それがいつまでつづくかは、私の筆の都合つごうと、紙面の編輯へんしゅうの都合とできまるのだから、判然はつきりした見当は今つきかねる。

電話口へ呼び出されたから受話器を耳へあてがって用事を訊いて見ると、ある雑誌社の男が、私の写真を貰いたいのだが、いつ撮りに行って好いか都合を知らしてくれろというのである。私は「写真は少し困ります」と答えた。

私はこの雑誌とまるで関係をもっていなかった。それでも過去三四年の間にその一二冊を手にした記憶はあった。人の笑っている顔ばかりをたくさん載せるのがその特色だと思ったほかに、今は何にも頭に残っていない。けれどもそこにわざとらしく笑って

いる顔の多くが私に与えた不快の印象はいまだに消えずにいた。それで私は断ことわろうとしたのである。

雑誌の男は、卯年うづしの正月号だから卯年の人の顔を並べたいのだという希望を述べた。私は先方のいう通り卯年の生れに相違なかった。それで私はこう云った。――

「あなたの雑誌へ出すために撮とる写真は笑わなくってはいけないのでしよう」

「いえそんな事はありません」と相手はすぐ答えた。あたかも私が今までその雑誌の特色を誤解していたごとくに。

「当り前の顔で構いませんなら載せていただいても宜よろしゅうござ

います」

「いえそれで結構でございますから、どうぞ」

私は相手と期日の約束をした上、電話を切った。

中なかいちにち一日おいて打ち合せをした時間に、電話をかけた男が、綺麗きれい

な洋服を着て写真機を携たずさえて私の書斎に這はい入って来た。私はしば

らくその人と彼の従事している雑誌について話をした。それから

写真を二枚撮とって貰った。一枚は机の前に坐っている平生の姿、

一枚は寒い庭前にわさきの霜しもの上に立っている普通の態度であった。書斎

は光線がよく透とおらないので、機械を据すえつけてからマグネシアを

燃もした。その火の燃えるすぐ前に、彼は顔を半分ばかり私の方へ

出して、「御約束ではございますが、少しどうか笑っていただけ
ますまいか」と云った。私はその時突然微かな滑稽を感じた。し
かし同時に馬鹿な事をいう男だという気もした。私は「これで好
いでしょう」と云ったなり先方の注文には取り合わなかった。彼
が私を庭の木立こだちの前に立たして、レンズを私の方へ向けた時もま
た前と同じような鄭寧ていねいな調子で、「御約束ではございますが、少
しどうか……」と同じ言葉を繰り返した。私は前よりもなお笑う
気になれなかった。

それから四日ばかり経つと、彼は郵便で私の写真を届けてくれ
た。しかしその写真はまさしく彼の注文通りに笑っていたのであ

る。その時私は中^{あて}が外^{はず}れた人のように、しばらく自分の顔を見つめていた。私にはそれがどうしても手を入れて笑っているように拵^{こしら}えたものとしか見えなかつたからである。

私は念のため家^{うち}へ来る四五人のものにその写真を出して見せた。彼らはみんな私と同様に、どうも作って笑わせたものらしいという鑑定を下^{くだ}した。

私は生れてから今日^{こんにち}までに、人の前で笑いたくもないのに笑って見せた経験が何度となくある。その偽^{いつわ}りが今この写真師のために復讐^{ふくしゅう}を受けたのかも知れない。

彼は気味のよくない苦笑を洩^もらしている私の写真を送ってくれ

たけれども、その写真を載せると云った雑誌はついに届けなかった。

三

私がHさんからヘクターを貰った時の事を考えると、もういつの間にか三四年の昔になっている。何だか夢のような心持もする。

その時彼はまだ乳離れのしたばかりの小供であった。Hさんの御弟子は彼を風呂敷ふろしきに包んで電車に載せて宅まで連れて来てくれ

た。私はその夜彼を裏の物置の隅すみに寝かした。寒くないように藁わらを敷いて、できるだけ居心地の好い寝床ねどこを拵こしらえてやったあと、私は物置の戸を締しめた。すると彼は宵よいの口くちから泣き出した。夜中には物置の戸を爪で搔き破って外へ出ようとした。彼は暗い所にたった独りひと寝るのが淋しかったのだらう、翌あく朝あさまでまんじりともしない様子であった。

この不安は次の晩もつづいた。その次つぎの晩もつづいた。私は一週間余りかかって、彼が与えられた藁の上にようやく安らかに眠るようになるまで、彼の事が夜よるになると必ず気にかかった。

私の小供は彼を珍らしかって、間まがな隙すきがな玩弄物おもちゃにした。け

れども名がないのでついに彼を呼ぶ事ができなかつた。ところが生きたものを相手にする彼らには、是非とも先方の名を呼んで遊ぶ必要があつた。それで彼らは私に向つて犬に名を命けてくれとせがみ出した。私はとうとうヘクトーという偉い名を、この小供達の朋友ほうゆうに与えた。

それはイリアッドに出てくるトロイ一の勇将の名前であつた。トロイと希臘ギリシヤと戦争をした時、ヘクトーはついにアキリスのために打たれた。アキリスはヘクトーに殺された自分の友達かたきの讐なみを取つたのである。アキリスが怒いかつて希臘方がたから躍おどり出した時に、城の中に逃げ込まなかつたものはヘクトー一人であつた。ヘク

トーは三たびトロイの城壁をめぐるってアキリスの鋒先ほこさきを避けた。アキリスも三たびトロイの城壁をめぐるってその後あとを追いかけた。そうしてしまいにとうとうへクトーを槍やりで突き殺した。それから彼の死骸しがいを自分の軍車チャリオットに縛りしばつけてまたトロイの城壁を三度引き摺ずり廻した。……

私はこの偉大な名を、風呂敷包にして持って来た小さい犬に与えたのである。何にも知らないはずの宅うちの小供も、始めは変な名だなあと云っていた。しかしじきに慣れた。犬もへクトーと呼ばれるたびに、嬉うれしそうに尾を振った。しまいにはさすがの名もジョンとかジョージとかいう平凡な耶蘇教信者ヤンキョウシンジャの名前と一様に、

毫ごうも古典クラシカル的な響こを私に与えなくなつた。同時に彼はしだいに宅の
ものから元もとほど珍重ちんじゆうされないようになった。

ヘクトーは多くの犬がたいてい罹かかるジステンパーという病氣の
ために一時入院した事がある。その時は子供がよく見舞みまいに行つ
た。私も見舞に行つた。私の行つた時、彼はさも嬉しそうに尾を
振つて、懐なつかしい眼を私の上に向けた。私はしゃがんで私の顔を
彼の傍そばへ持つて行つて、右の手で彼の頭を撫なでてやった。彼はそ
の返礼に私の顔を所嫌ところきらひわず舐なめようとしてやまなかつた。その時
彼は私の見ている前で、始めて医者いしやの勧すすめる少量の牛乳を呑のん
だ。それまで首を傾かしげていた医者も、この分ならあるいは癒なおるか

も知れないと云った。ヘクターははたして癒った。そうして宅へ
帰って来て、元気に飛び廻った。

四

日ならずして、彼は二三の友達を拵えた。その中で最も親し
かったのはすぐ前の医者キリストきょうとの宅にいる彼と同年輩ぐらいの悪戯者いたずらもので
あった。これは基督教徒キリストきょうとに相応ふさわしいジョンという名前なまえを持ってい
たが、その性質は異端者いたんしゃのヘクターよりも遙はるかに劣おとっていたよう
である。むやみに人に噛みつく癖くせがあるので、しまいにはとうとう

打ち殺されてしまった。

彼はこの悪友を自分の庭に引き入れて勝手な狼藉を働らいて私を困らせた。彼らはしきりに樹の根を掘って用もないのに大きな穴を開けて喜んだ。綺麗な草花の上にわざと寝転んで、花も茎も容赦なく散らしたり、倒したりした。

ジョンが殺されてから、無聊な彼は夜遊び昼遊びを覚えるようになった。散歩などに出かける時、私はよく交番の傍に日向ぼっこをしている彼を見る事があった。それでも宅にさえいれば、よくうさん臭いものに吠えついて見せた。そのうちで最も猛烈に彼の攻撃を受けたのは、本所辺から来る十歳ばかりになる角兵衛獅

子しの子であつた。この子はいつでも「今日こんにちは御祝ごしゆいい」と云つて入つて来る。そうして家うちの者から、麵麩パンの皮と一錢銅貨を貰わないうちは帰らない事に一人できめていた。だからへクトーがいくら吠えても逃げ出さなかつた。かえつてへクトーの方が、吠えながら尻尾しっぽを股またの間に挟はさんで物置の方へ退却するのが例になつていた。要するにへクトーは弱虫であつた。そうして操行からいうと、ほとんど野良犬のらいぬと扱えらぶところのないほどに墮落していた。それでも彼らに共通な人懐ひとなつつこい愛情はいつまでも失わずにいた。時々顔を見合せると、彼は必ず尾かならを掉ふつて私に飛びついて来た。あるいは彼の背を遠慮なく私の身体からだに擦すりつけた。私は彼の泥足

のために、衣服や外套がいとうを汚よごした事が何度あるか分らない。

去年の夏から秋へかけて病あひだ気をした私は、一カ月ばかりの間ついにへクトーに会う機会を得よこずに過あぎた。病やまいがようやく怠おこたって、床とこの外へ出られるようになってから、私は始めて茶の間の縁えんに立たって彼の姿を宵闇よいやみの裡うちに認しめた。私はすぐ彼の名を呼んだ。しかし生垣いけがきの根にじつとうずくままっている彼は、いくら呼んでも少しも私の情なさけに応こたじななかった。彼は首も動うかさず、尾も振ふらず、ただ白かたまりい塊かたまりのまま垣根にこびりついてるだけでああった。私は一カ月ばかり会あわなないうちに、彼がもう主人の声を忘れてしまったものと思おもって、微かすかな哀愁あいしゅうを感あぜずにはいられななかった。

まだ秋の始めなので、どこの間の雨戸も締められずに、星の光が明け放たれた家の中からよく見られる晩であった。私の立っていた茶の間の縁には、家のものが二三人いた。けれども私がへクトーの名前を呼んでも彼らはふり向きもしなかった。私がへクトーに忘れられたごとくに、彼らもまたへクトーの事をまるで念頭に置いていないように思われた。

私は黙って座敷へ帰って、そこに敷いてある布団の上に横になった。病後の私は季節に不相当な黒八丈の襟のかかった銘仙のどてらを着ていた。私はそれを脱ぐのが面倒だから、そのまま仰向に寝て、手を胸の上で組み合せたなり黙って天井を見つめてい

た。

五

翌朝書齋の縁に立って、初秋の庭の面を見渡した時、私は偶然
また彼の白い姿を苔の上に認めた。私は昨夕の失望を繰り返すの
が厭さに、わざと彼の名を呼ばなかった。けれども立ったなり
じつと彼の様子を見守らずにはいられなかった。彼は立木の根方
に据えつけた石の手水鉢の中に首を突き込んで、そこに溜って
る雨水をびちやびちや飲んでいった。

この手水鉢はいつ誰が持って来たとも知れず、裏庭の隅すみに転ころがっていたのを、引越した当時植木屋に命じて今の位置に移させた六角形ろっかくがたのもので、その頃は苔こけが一面に生はえて、側面に刻みつけた文字もんじも全く読めないようになっていた。しかし私には移す前一度判然はつきりとそれを読んだ記憶があつた。そうしてその記憶が文字として頭に残らないで、変な感情としていまだに胸の中を往来していた。そこには寺と仏と無常の匂においが漂ただよっていた。

ヘクトーは元気なさそうに尻尾しつぽを垂れて、私の方へ背中を向けていた。手水鉢を離れた時、私は彼の口から流れる垂涎よだれを見た。

「どうかしてやらないといけない。病気だから」と云って、私は

看護婦を顧み^{かえり}た。私はその時まだ看護婦を使っていたのである。

私は次の日も木賊^{とくさ}の中に寝ている彼を一目見た。そうして同じ言葉を看護婦に繰り返した。しかしヘクターはそれ以来姿を隠し、たぎり再び宅^{うち}へ帰って来なかった。

「医者へ連れて行こうと思つて、探したけれどもどこにもおりません」

家^{うち}のものはこう云つて私の顔を見た。私は黙っていた。しかし腹の中では彼を貰い受けた当時の事さえ思い起された。届書^{とどけしょ}を出す時、種類という下へ混血児^{あいのこ}と書いたり、色という字の下へ赤斑^{あかまだら}と書いた滑稽^{こっけい}も微^{かす}かに胸に浮んだ。

彼がいなくなつて約一週間も経つたと思つ頃、一二丁隔つたある人の家から下女が使に來た。その人の庭にある池の中に犬の死骸が浮いているから引き上げて頸輪を改ためて見ると、私の家の名前が彫りつけてあつたので、知らせに來たといふのである。下女は「こちらで埋めておきましょうか」と尋ねた。私はすぐ車夫をやって彼を引き取らせた。

私は下女をわざわざ寄こしてくれた宅がどこにあるか知らなかつた。ただ私の小供の時分から覚えてゐる古い寺の傍だろつとばかり考えていた。それは山鹿素行の墓のある寺で、山門の手前に、旧幕時代の記念のように、古い榎が一本立っているのが、私

の書齋の北の縁から数多の屋根を越してよく見えた。

車夫は筵の中にヘクトーの死骸を包んで帰って来た。私はわざとそれに近づかなかった。白木の小さい墓標を買って来させて、それへ「秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ」という一句を書いた。

私はそれを家のものに渡して、ヘクトーの眠っている土の上に建てさせた。彼の墓は猫の墓から東北に当って、ほぼ一間ばかり離れているが、私の書齋の、寒い日の照らない北側の縁に出て、硝子戸のうちから、霜に荒された裏庭を覗くと、二つともよく見える。もう薄黒く朽ちかけた猫のに比べると、ヘクトーのはまだ生々しく光っている。しかし間もなく二つとも同じ色に古びて、

同じく人の眼につかなくなるだろう。

六

私はその女に前後四五回会った。

始めて訪ねられた時私は留守であつた。取次のものが紹介状を持って来るように注意したら、彼女は別にそんなものを貰う所がないといつて帰って行つたそうである。

それから一日ほど経つて、女は手紙で直接に私の都合を聞き合せに来た。その手紙の封筒から、私は女がつい眼と鼻の間に住ん

でいる事を知った。私はすぐ返事を書いて面会日を指定してやった。

女は約束の時間を違えず来た。三つ柏の紋のついた派出な色の縮緬の羽織を着ているのが、一番先に私の眼に映った。女は私の書いたものをたいてい読んでいるらしかった。それで話は多くそちらの方面へばかり延びて行った。しかし自分の著作について初見の人から賛辞ばかり受けているのは、ありがたいようではなはだこそばゆいものである。実をいうと私は辟易した。

一週間おいて女は再び来た。そうして私の作物をまた賞めてくれた。けれども私の心はむしろそういう話題を避けたがっ

た。三度目に来た時、女は何かに感激したものと見えて、袂たもとから手帛ハンケチを出して、しきりに涙を拭ぬぐった。そうして私に自分のこれまで経過して来た悲しい歴史を書いてくれないかと頼んだ。しかしその話を聴かない私には何という返事も与えられなかった。私は女に向って、よし書くにしたところで迷惑を感じずる人が出て来はしないかと訊きいて見た。女は存外判然はっきりした口調で、実名じつみょうさえ出さなければ構わないと答えた。それで私はとにかく彼女の経歴を聴きくために、とくに時間を拵こしらえた。

するとその日になって、女は私に会いたいという別の女の人を連れて来て、例の話はこの次に延ばして貰もらいたいと云った。私に

は固もとより彼女の違約を責める気はなかった。二人を相手に世間話を
をして別れた。

彼女が最後に私の書齋に坐すわったのはその次の日の晩であった。
彼女は自分の前に置かれた桐きりの手焙てあぶりの灰を、真鍮しんちゆうの火箸ひばしで突ツツ
きなから、悲しい身の上話を始める前、黙っている私にこう云つ
た。

「この間は昂奮こうふんして私の事を書いていただきたいように申し上げ
ましたが、それは止やめに致します。ただ先生に聞いていただくだ
けにしておきますから、どうかそのおつもりで……」

私はそれに対してこう答えた。

「あなたの許諾を得ない以上は、たといどんなに書きたい事柄ことがらが出て来てもけっして書く気遣きづかいはありませんから御安心なさい」

私が充分な保証を女に与えたので、女はそれではと云って、彼女の七八年前からの経歴を話し始めた。私は默然もくねんとして女の顔を見守っていた。しかし女は多く眼を伏せて火鉢ひばちの中ばかり眺めていた。そうして綺麗きれいな指で、真鍮の火箸を握っては、灰の中へ突き刺した。

時々腑ふに落ちないところが出てくると、私は女に向って短かい質問をかけた。女は単簡たんかんにまた私の納得なっとくできるように答をした。しかしたいいていは自分一人で口を利きいていたので、私はむしろ木

像のようにじつとしていられるだけであった。

やがて女の頬は熱^{ほて}って赤くなった。白粉^{おしろい}をつけていないせい
か、その熱った頬の色が著るしく私の眼に着いた。俯向^{うつむき}になつて
いるので、たくさんある黒い髪の毛も自然私の注意を惹^ひく種に
なつた。

七

女の告白は聴いている私を息苦しくしたくらいに悲痛^{きわ}を極めた
ものであった。彼女は私に向つてこんな質問をかけた。――

「もし先生が小説を御書きになる場合には、その女の始末をどうなさいますか」

私は返答に窮した。

「女の死ぬ方がいいと御思いになりますか、それとも生きているように御書きになりますか」

私はどちらにでも書けると答えて、暗あんに女の気色けしきをうかがった。女はもつと判然あいさつした挨拶を私から要求するように見えた。私は仕方なしにこう答えた。――

「生きるという事を人間の中心点として考えれば、そのままにしていて差支さしつかえないでしょう。しかし美しくしいものや気高けだかいものを――

義において人間を評価すれば、問題が違って来るかも知れませ
ん」

「先生はどちらを御^お扱^えびになりますか」

私はまた躊躇^{ちゆうちゆう}した。黙って女のいう事を聞いているよりほかに
仕方がなかった。

「私は今持っているこの美しい心持が、時間というもののために
だんだん薄れて行くのが怖^{こわ}くってたまらないのです。この記憶が
消えてしまつて、ただ漫然と魂の抜^ぬ殻^がのように生きている未来を
想像すると、それが苦痛で苦痛で恐ろしくつてたまらないので
す」

私は女が今広い世間せかいの中にたった一人立って、一寸いっすんも身動きの
できない位置にいる事を知っていた。そうしてそれが私の力でど
うする訳にも行かないほどに、せっぱつまった境遇である事も
知っていた。私は手のつけようのない人の苦痛を傍観する位置に
立たせられてじっとしていた。

私は服薬の時間を計るため、客の前も憚はばからず常に袂時計たもとどけいを座
蒲団ぶとんの傍わきに置く癖くせをもっていた。

「もう十一時だから御帰りなさい」と私はしまいに女に云った。
女は厭いやな顔もせず立ち上った。私はまた「夜が更ふけたから送っ
て行って上げましょう」と云って、女と共に沓脱くつぬぎに下りた。

その時美しくしい月が静かな夜を残る隈なく照らしていた。往来へ出ると、ひっそりした土の上にひびく下駄の音はまるで聞こえなかった。私は懐手をしたまま帽子も被らずに、女の後に跟いて行った。曲り角の所で女はちよつと会釈して、「先生に送っていない。ただいではもつたいのうございます」と云った。「もつたいない訳がありません。同じ人間です」と私は答えた。

次の曲り角へ来たとき女は「先生に送っていたただくのは光栄でございます」とまた云った。私は「本当に光栄と思えますか」と真面目に尋ねた。女は簡単に「思います」とはつきり答えた。私は「そんなら死なずに生きていらっしやい」と云った。私は女が

この言葉をどう解釈したか知らない。私はそれから一丁ばかり行つて、また宅うちの方へ引き返したのである。

むせっぽいような苦しい話を聞かされた私は、その夜かえつて人間らしい好い心持を久しぶりに経験した。そうしてそれが尊たつとい文芸上の作物さくぶつを読んだあとの気分と同じものだという事に気がついた。有楽座や帝劇へ行つて得意になっていた自分の過去の影法師が何となく浅ましく感ぜられた。

不愉快に充ちた人生をとぼとぼ辿りつつある私は、自分のいつか一度到着しなければならぬ死という境地について常に考えている。そうしてその死というものを生よりは楽なものだとばかり信じている。ある時はそれを人間として達し得る最上至高の状態だと思ふ事もある。

「死は生よりも尊たつとい」

こういう言葉が近頃では絶えず私の胸を往來おうらいするようになってた。

しかし現在の私は今まのあたりに生きている。私の父ふ母ぼ、私の祖父そふ母ぼ、私の曾祖父そうそふ母ぼ、それから順次に溯さかのぼって、百年、二百

年、乃至千年万年の間に馴致された習慣を、私一代で解脱する事ができないので、私は依然としてこの生に執着しているのである。

だから私の他に与える助言はどうしてもこの生の許す範囲内においてしなければすまないように思う。どういう風に生きて行くかという狭い区域のなかでばかり、私は人類の一人として他の人類の一人に向わなければならぬと思う。すでに生の中に活動する自分を認め、またその生の中に呼吸する他人を認める以上は、互いの根本義はいかに苦しくてもいかに醜くてもこの生の上に置かれたものと解釈するのが当り前であるから。

「もし生きているのが苦痛なら死んだら好いでしよう」

こうした言葉は、どんなに情なく世を観ずる人の口からも聞き得ないだろう。医者などは安らかな眠に赴む^{おも}こうとする病人に、わざと注射の針を立てて、患者の苦痛を一刻でも延ばす工夫を凝^こらしている。こんな拷問^{ごうもん}に近い所作^{しよさ}が、人間の徳義として許されているのを見ても、いかに根強く我々が生の一字に執着^{しゆつちやく}しているかが解る。私はついにその人に死をすすめる事ができなかつた。

その人はとても回復の見込みのつかないほど深く自分の胸を傷^{きず}けられていた。同時にその傷が普通の人の経験にないような美しい思い出の種となつてその人の面^{おもて}を輝やかしていた。

彼女はその美しいものを宝石のごとく大事に永久彼女の胸の奥に抱き締めていたがった。不幸にして、その美しいものはとりも直さず彼女を死以上に苦しめる手傷そのものであった。二つの物は紙の裏表のごとくとうてい引き離せないのである。

私は彼女に向って、すべてを癒す「時」の流れに従って下れと云った。彼女はもしそうしたらこの大切な記憶がしだいに剥げて行くだろうと嘆いた。

公平な「時」は大事な宝物を彼女の手から奪う代りに、その傷口もしだいに療治してくれるのである。烈しい生の歡喜を夢のように暈してしまおうと同時に、今の歡喜に伴なう生々しい苦痛も取

り除ける手段を怠たららないのである。

私は深い恋愛に根ざしている熱烈な記憶を取り上げても、彼女の創口から滴る血潮を「時」に拭わしめようとした。いくら平凡でも生きて行く方が死ぬよりも私から見た彼女には適当だったからである。

かくして常に生よりも死を尊いと信じている私の希望と助言は、ついにこの不愉快に充ちた生というものを超越する事ができなかった。しかも私にはそれが実行上における自分を、凡庸な自然主義者として証拠立てたように見えてならなかった。私は今でも半信半疑の眼でじっと自分の心を眺めている。

私が高等学校にいた頃、比較的親しく交際つきあった友達の中に〇と
いう人がいた。その時分からあまり多くの朋友ほうゆうを持たなかった私
には、自然〇と往来ゆききを繁しげくするような傾向があつた。私はたいて
い一週に一度くらいの割で彼を訪たずねた。ある年の暑中休暇などに
は、毎日欠かさず真砂町まさごちように下宿している彼を誘つて、大川おおかわの水泳
場まで行つた。

〇は東北の人だから、口の利き方かたに私などと違つた鈍どんでゆつた
りした調子があつた。そうしてその調子がいかにもよく彼の性質

を代表しているように思われた。何度となく彼と議論をした記憶のある私は、ついに彼の怒おこったり激したりする顔を見る事ができずにしまった。私はそれだけでも充分彼を敬愛あたいに価ちやうじやする長者として認めていた。

彼の性質が鷹揚おうようであるごとく、彼の頭脳も私よりは遙はるかに大きかった。彼は常に当時の私には、考えの及ばないような問題を一人で考えていた。彼は最初から理科へ入る目的をもっていたながら、好んで哲学の書物などを繙ひもといた。私はある時彼からスペンサーの第一原理という本を借りた事をいまだに忘れずにいる。

空の澄み切った秋日あきびよりなどには、よく二人連れ立って、足の向

く方へ勝手な話をしながら歩いて行った。そうした場合には、往
来へ塀越へいごしに差し出た樹きの枝から、黄色に染まった小ちさい葉が、風
もないのに、はらはらと散る景色けしきをよく見た。それが偶然彼の眼
に触れた時、彼は「あッ悟った」と低い声で叫んだ事があつた。
ただ秋の色の空くうに動くのを美しくいと観ずるよりほかに能のない
私には、彼の言葉が封じ込められた或秘密ふちようの符徴として怪しい響
を耳に伝えるばかりであつた。「悟りというものは妙なものだ
な」と彼はその後あとから平生のゆつたりした調子で独言ひとりごとのように説
明した時も、私には一口あいさつの挨拶もできなかつた。

彼は貧生であつた。大観音おおがんのんの傍そばに間借をして自炊じすいしていた頃に

は、よく干鮭からざけを焼いて佗わびしい食卓に私を着かせた。ある時は餅も菓子ちがしの代りに煮豆を買って来て、竹の皮のまま双方から突つつき合った。

大学を卒業すると間もなく彼は地方の中学に赴任した。私は彼のためにそれを残念に思った。しかし彼を知らない大学の先生には、それがむしろ当然と見えたかも知れない。彼自身は無論平気であつた。それから何年かの後のちに、たしか三年の契約で、支那のある学校の教師に雇われて行つたが、任期が充みちて帰るとすぐまた内地の中学校長になつた。それも秋田から横手に遷うつされて、今では樺太かばふとの校長をしているのである。

去年上京したついでに久しぶりで私を訪ねてくれた時、取次のものから名刺を受取った私は、すぐその足で座敷へ行つて、いつもの通り客より先に席に着いていた。すると廊下伝に室の入口まで来た彼は、座蒲団の上にきちんと坐っている私の姿を見るや否や、「いやに澄ましているな」と云った。

その時向の言葉が終るか終らないうちに「うん」という返事がいつか私の口を滑って出てしまった。どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、それほど自然に、それほど雑作なく、それほど拘泥わずに、するすると私の咽喉を滑り越したものであろうか。私はその時透明な好い心持がした。

十

向い合つて座を占めた〇と私とは、何より先に互の顔を見返して、そこにまだ昔むかしのままの面影おもかげが、懐なつかしい夢の記念のように残っているのを認めた。しかしそれはあたかも古い心が新しい気分の中にぼんやり織り込まれていると同じ事で、薄暗く一面に霞かすんでいた。恐ろしい「時」の威力に抵抗して、再びもとの姿に返る事は、二人にとつてもう不可能であつた。二人は別れてから今会うまでの間に挟はさまっている過去という不思議なものを顧かえりみない訳に行かなかつた。

〇は昔し林檎りんごのように赤い頬と、人一倍大きな丸い眼と、それから女に適したほどふっくらりした輪廓りんかくに包まれた顔をもっていた。今見てもやはり赤い頬と丸い眼と、同じく骨張らない輪廓の持主ではあるが、それが昔しとはどこか違っている。

私は彼に私の口髭くちひげと揉み上げもあげを見せた。彼はまた私のために自分の頭を撫なでて見せた。私のは白くなって、彼のは薄く禿はげかかっているのである。

「人間も樺太かばとまで行けば、もう行く先はなかるうな」と私が調戯からかうと、彼は「まあそんなものだ」と答えて、私のまだ見た事のないう樺太の話をして聞かせた。しかし私は今それをみんな

忘れてしまった。夏は大変好い所だという事を覚えているだけである。

私は幾年ぶりかで、彼といっしょに表へ出た。彼はフロックの上へ、とんびのような外套がいとうをぶわぶわに着ていた。そうして電車の中で釣革つりかわにぶら下りながら、隠袋かくしから手帛ハンケチに包んだものを出して私に見せた。私は「なんだ」と訊きいた。彼は「栗饅頭くりまんじゅうだ」と答えた。栗饅頭は先刻さつき彼が私の宅うちにいた時に出した菓子であった。彼がいつの間、それを手帛に包んだらうかと考えた時、私はちよつと驚かされた。

「あの栗饅頭を取って来たのか」

「そうかも知れない」

彼は私の驚いた様子を馬鹿にするような調子でこう云ったなり、その手帛ハンケチの包をまた隠袋かくしに収めてしまった。

我々はその晩帝劇へ行つた。私の手に入れた二枚の切符に北側から入れという注意が書いてあつたのを、つい間違えて、南側へ廻ろうとした時、彼は「そっちじゃないよ」と私に注意した。私はちよつと立ち留まつて考えた上、「なるほど方角は樺太かばふとの方が確たしかなようだ」と云いながら、また指定された入口の方へ引き返した。

彼は始めから帝劇を知っていると云っていた。しかし晩餐ばんさんを済

ました後あとで、自分の席へ帰ろうとするとき、誰でもやる通り、二階と一階の扉ドアを間違えて、私から笑われた。

折々隠袋から金縁きんぎょちの眼鏡めがねを出して、手に持った摺物すりものを読んで見る彼は、その眼鏡をはずさずに遠い舞台を平気で眺めていた。

「それは老眼鏡じゃないか。よくそれで遠い所が見えるね」
「なにチャブドーだ」

私にはこのチャブドーという意味が全く解らなかった。彼はそれを大差なしという支那語だと云って説明してくれた。

その夜の帰りに電車の中で私と別れたぎり、彼はまた遠い寒い日本の領地の北の端はすれに行ってしまった。

私は彼を想い出すたびに、達人という彼の名を考える。するとその名がとくに彼のために天から与えられたような心持になる。そうしてその達人が雪と氷に鎖ざされた北の果に、まだ中学校長をしているのだなと思う。

十一

ある奥さんがある女の人を私に紹介した。

「何か書いたものを見ていただきたいのだそうでございます」

私は奥さんのこの言葉から、頭の中でいろいろの事を考えさせ

られた。今まで私いまの所へ自分の書いたものを読んでくれと云つて来たものは何人となくある。その中には原稿紙の厚さで、一寸または二寸ぐらいの嵩かさになる大部のものも交っていた。それを私は時間の都合の許す限りなるべく読んだ。そうして簡単な私はただ読みさえすれば自分の頼まれた義務を果はたしたものと心得て満足していた。ところが先方では後から新聞に出してくれと云つたり、雑誌へ載せて貰もらいたいと頼んだりするのが常であつた。中には他ひとに読ませるのは手段で、原稿を金に換えるのが本来の目的であるように思われるのも少なくはなかつた。私は知らない人の書いた読みにくい原稿を好意的に読むのがだんだん厭いやになつて来た。

もっとも私の時間に教師をしていた頃から見ると、多少の弾力性ができてきたには相違なかった。それでも自分の仕事にかかれば腹の中はずいぶん多忙であった。親切づくで見てやろうと約束した原稿すら、なかなか埒らちのあかない場合もないとは限らなかつた。

私は私の頭で考えた通りの事をそのまま奥さんに話した。奥さんはよく私のいう意味を領解して帰って行った。約束の女が私の座敷へ来て、座蒲団ざぶとんの上に坐ったのはそれから間もなくであった。佻わびしい雨が今にも降り出しそうな暗い空を、硝子戸ガラスどこし越に眺めながら、私は女にこんな話をした。――

「これは社交ではありません。御互に体裁ていさいの好い事ばかり云い合っていては、いつまで経たったって、啓発されるはずも、利益を受ける訳もないのです。あなたは思い切って正直にならなければ駄目だめですよ。自分さえ充分に開放して見せれば、今あなたがどこに立ってどっちを向いているかという實際が、私によく見えて来るのです。そうした時、私は始めてあなたを指導する資格を、あなたから与えられたものと自覚しても宜よろしいのです。だから私が何か云ったら、腹に答えべき或物を持って以上、けっして黙っていてはいけません。こんな事を云ったら笑われはしまいか、恥を搔かきはしまいか、または失礼だといって怒られはしまいか、

かなどと遠慮して、相手に自分という正体を黒く塗り潰した所ばかり示す工夫をするならば、私がいくらあなたに利益を与えようと焦慮ても、私の射る矢はことごとく空矢になってしまっただけです。

「これは私のあなたに対する注文ですが、その代り私の方でもこの私というものを隠しは致しません。ありのままを曝け出すよりほかに、あなたを教える途はないのです。だから私の考えのどこかに隙があつて、その隙をもしあなたから見破られたら、私はあなたに私の弱点を握られたという意味で敗北の結果に陥るのです。教を受ける人だけが自分を開放する義務をもっていると思つ

のは間違っています。教える人も己おのれをあなたの前に打ち明けるのです。双方とも社交を離れて勘破かんぱし合うのです。

「そういう訳で私はこれからあなたの書いたものを拝見する時に、ずいぶん手ひどい事を思い切って云うかも知れませんが、しかし怒ってはいけません。あなたの感情を害するためになるのではないのですから。その代りあなたの方でも腑ふに落ちない所があったらどこまでも切り込んでいらっしやい。あなたが私の主意を了解している以上、私はけっして怒るはずはありませんから。

「要するにこれはただ現状維持を目的として、上滑うわすべりな円滑を主に置く社交とは全く別物なのです。解りましたか」

女は解つたと云つて歸つて行つた。

十二

私に短冊たんざくを書けの、詩を書けのと云つて来る人がある。そうしてその短冊やら続ぬめやらをまだ承諾もしないうちに送つて来る。最初のうちはせつかくの希望を無にするのも氣の毒だという考から、拙ますい字とは思いつながら、先方の云うなりになつて書いていた。けれどもこうした好意は永続しにくいものと見えて、だんだん多くの人の依頼を無にするような傾向が強くなつて来た。

私はすべての人間を、毎日毎日恥を搔くために生れてきたものだ。たとさえ考える事もあるのだから、変な字を他に送ってやるくらいひとの所作は、あえてしようと思えば、やれないとも限らないのである。しかし自分が病気するとき、仕事の忙がしい時、またはそんな真似まねのしたくない時に、そういう注文が引き続いて起ってくる、実際弱らせられる。彼らの多くは全く私の知らない人で、そうして自分達の送った短冊を再び送り返すこちらの手数てすうさえ、まるで眼中に置いていないように見えるのだから。

そのうちで一番私を不愉快にしたのは播州ばんしゅうの坂越さごしにいる岩崎という人であった。この人は数年前よく端書はがきで私に俳句を書いてく

れと頼んで来たから、その都度向うのいう通り書いて送った記憶のある男である。その後の事であるが、彼はまた四角な薄い小包を私に送った。私はそれを開けるのさえ面倒だったから、ついそのままにして書斎へ放り出しておいたら、下女が掃除をする時、つい書物と書物の間へ挟み込んで、まず体よくしまい失くした姿にしてしまった。

この小包と前後して、名古屋から茶の缶が私宛で届いた。しかし誰が何のために送ったものかその意味は全く解らなかった。私は遠慮なくその茶を飲んでしまった。するとほどなく坂越の男から、富士登山の画を返してくれと云ってきた。彼からそんなもの

を貰った覚おぼえのない私は、打ちやっうておいた。しかし彼は富士登山の画を返せ返せと三度も四度も催促してやまない。私はついにこの男の精神状態を疑い出した。「大方おおかた気違たがだろう。」私は心の中でこうきめたなり向うの催促にはいっさい取り合わない事にした。

それから二三方月経たった。たしか夏の初の頃と記憶しているが、私はあまり乱雑に取り散らされた書齋すわの中に坐すわっているのがうっとうしくなったので、一人でぼつぼつそこいらを片づけ始めた。その時書物の整理をするため、好い加減に積み重ねてある字引や参考書を、一冊ずつ改めて行くと、思いがけなく坂越の男が

寄こした例の小包が出て来た。私は今まで忘れていたものを、眼まのあたり見て驚ろいた。さっそく封を解といて中を検しらべたら、小さく畳んだ画が一枚入っていた。それが富士登山の図だったので、私はまた吃驚びっくりした。

包のなかにはこの画のほかの手紙が一通添えてあって、それに画の賛をしてくれという依頼と、御礼に茶を送るといふ文句が書いてあった。私はいよいよ驚ろいた。

しかしその時の私はとうてい富士登山の図などに賛をする勇気をもっていなかった。私の気分が、そんな事とは遥はるか懸かけ離れた所にあつたので、その画に調和するような俳句を考えている暇が

なかつたのである。けれども私は恐縮した。私は丁寧な手紙を書いて、自分の怠慢を謝した。それから茶の御礼を云った。最後に富士登山の図を小包にして返した。

十三

私はこれで一段落ついたものと思つて、例の坂越の男の事を、それぎり念頭に置かなかつた。するとその男がまた短冊を封じて寄こした。そうして今度は義士に關係のある句を書いてくれというのである。私はそのうち書こうと云つてやった。しかしなかなか

か書く機会が来なかったもので、ついそのままになってしまった。けれども執濃しつこいこの男の方ではけっしてそのままに済します気はなかつたものと見えて、むやみに催促を始め出した。その催促は一週に一遍か、二週に一遍の割できつと来た。それが必ず端書はがきに限かっていて、その書き出しには、必ず「拝啓失敬申し候えども」とあるにきまっていた。私はその人の端書を見るのがだんだん不愉快になって来た。

同時に向うの催促も、今まで私の予期していなかった変な特色を帯びるようになった。最初には茶をやったではないかという言葉が見えた。私がそれに取り合わずにいと、今度はあの茶を返

してくれという文句に改たまつた。私は返す事はたやすいが、その手数てかずが面倒だから、東京まで取りに来れば返してやると云つてやりたくなつた。けれども坂越の男にそういう手紙を出すのは、自分の品格かかに関わるような気がしてあえてし切れなかつた。返事を受け取らない先方はなおの事催促をした。茶を返さないならそれでも好いから、金一円をその代価として送つて寄せせというのである。私の感情はこの男に対してしだいに荒すさんで来た。しまいにはとうとう自分を忘れるようになった。茶は飲んでしまった、短冊は失なくしてしまつた、以来端書を寄こす事はいつさい無用であるとして書いてやつた。そうして心のうちで、非常に苦にが々しい気分

を経験した。こんな非紳士的な挨拶あいさつをしなければならぬような穴の中へ、私を追い込んだのは、この坂越の男であると思ったからである。こんな男のために、品格にもせよ人格にもせよ、幾分の墮落を忍ばなければならぬのかと考えると情なさけなかつたからである。

しかし坂越の男は平気であつた。茶は飲んでしまい、短冊は失なくしてしまふとは、余りと申せば……とまた端書はながきに書いて来た。そうしてその冒頭には依然として拝啓失敬申し候うかがえどもという文句が規則通り繰り返されていた。

その時私はもうこの男には取り合ふまいと決心した。けれども

私の決心は彼の態度に対して何の効果のあるはずはなかった。彼は相変らず催促をやめなかった。そうして今度は、もう一度書いてくれれば、また茶を送ってやるがどうだと云って来た。それから事いやしくも義士に関するのだから、句を作っても好いだらうと云って来た。

しばらく端書が中絶したと思うと、今度はそれが封書に変わった。もつともその封筒は区役所などで使う極めて安い鼠色ねずみいろのものであったが、彼はわざとそれに切手を貼はらないのである。その代り裏に自分の姓名も書かずに投函とうかんしていた。私はそれがために、倍の郵税を二度ほど払わせられた。最後に私は配達夫に彼の氏名

と住所とを教えて、封のまま先方へ逆送して貰った。彼はそれで六銭取られたせいか、ようやく催促を断念したらしい態度になった。

ところが二カ月ばかり経って、年が改まると共に、彼は私に普通の年始状を寄こした。それが私をちよつと感心させたので、私はつい短冊へ句を書いて送る気になった。しかしその贈物は彼を満足させるに足りなかった。彼は短冊が折れたとか、汚れたとか云って、しきりに書き直しを請求してやまない。現に今年の正月にも、「失敬申し候えども……」という依頼状が七八日頃ななようかに届いた。

私がこんな人に出会ったのは生れて始めてである。

十四

ついこの間昔むかし私の家うちへ泥棒の入った時の話を比較的くわ詳しく聞いた。

姉がまだ二人とも嫁かたづかずかたにいた時分の事だというから、年代にすると、多分私の生れる前後に当るのだろう、何しろ勤王とか佐幕とかいう荒々しい言葉の流行はったやかましい頃なのである。

ある夜一番目の姉が、夜中よなかに小用こように起きた後あと、手を洗うため

に、潜戸くぐりどを開けると、狭い中庭の隅すみに、壁を圧おしつけるような勢いきおいで立っている梅の古木の根方ねがたが、かっと明るく見えた。姉は思慮をめぐらす暇いとまもないうちに、すぐ潜戸を締めしてしまったが、締めたあとで、今目前に見た不思議な明るさをそこに立ちながら考えたのである。

私の幼心に映ったこの姉の顔は、いまだに思い起そうとすれば、いつでも眼の前に浮ぶくらい鮮あざやかである。しかしその幻像はすでに嫁に行つて齒を染めたあとの姿であるから、その時縁側えんがわに立って考えていた娘盛りの彼女を、今胸のうちに描き出す事はちよつと困難である。

広い額、浅黒い皮膚、小さいけれども明確はつきりした輪廓りんかくを具えている鼻、人並ひとなみより大きい二重瞼ふたえまぶちの眼、それから御沢おさわという優しい名、——私はただこれらを綜合そうごうして、その場合における姉の姿を想像するだけである。

しばらく立ったまま考えていた彼女の頭に、この時もしかすると火事じゃないかという懸念けねんが起った。それで彼女は思い切つてまた切戸きりどを開けて外を覗のぞこうとする途端とたんに、一本の光る抜身ぬきみが、闇やみの中から、四角に切った潜戸の中へすうと出た。姉は驚いて身を後あとへ退ひいた。その隙ひまに、覆面をした、龕灯がんどうちようちん提灯ていとうを提さげた男が、抜刀のまま、小さい潜戸から大勢家うちの中へ入って来たのだそうで

ある。泥棒の人数はたしか八人とか聞いた。

彼らは、他を殺めるために来たのではないから、おとなしくしていてくれさえすれば、家のものに危害は加えない、その代り軍用金を借せと云って、父に迫った。父はないと断った。しかし泥棒はなかなか承知しなかった。今角の小倉屋という酒屋へ入って、そこで教えられて来たのだから、隠しても駄目だと云って動かなかった。父は不精無性に、とうとう何枚かの小判を彼らの前に並べた。彼らは金額があまり少な過ぎると思ったものか、それでもなかなか帰ろうとしないので、今まで床の中に寝ていた母が、「あなたの紙入に入っているのもやっておしまいなさい」と

忠告した。その紙入の中には五十両ばかりあったとかいう話である。泥棒が出て行ったあとで、「余計な事をいう女だ」と云つて、父は母を叱りつけたそうである。

その事があって以来、私の家では柱を切り組きくみにして、その中へあり金を隠す方法を講じたが、隠すほどの財産もできず、また黒くろ装束そうぞくを着けた泥棒も、それぎり来ないので、私の生長する時分には、どれが切組きりくみにしてある柱かまるで分らなくなっていた。

泥棒が出て行く時、「この家は大変締りしまの好い宅うちだ」と云つて賞ほめたそうだが、その締りの好い家を泥棒に教えた小倉屋の半兵衛さんの頭には、あくる日から擦り傷かすりきずがいくつとなくできた。こ

れは金はありませんと断わるたびに、泥棒がそんなはずがあるものかと云っては、抜身の先でちよいちよい半兵衛さんの頭を突ツついたからだという。それでも半兵衛さんは、「どうしても宅うちにはありません、裏の夏目さんにはたくさんあるから、あすこへいらっしやい」と強情を張り通して、とうとう金は一文も奪とられずにしまった。

私はこの話を妻さいから聞いた。妻はまたそれを私の兄ちやうけから茶受話ばなしに聞いたのである。

十五

私が去年の十一月学習院で講演をしたら、薄謝と書いた紙包を後から届けてくれた。立派な水引みずひきがかかっているので、それを除はずして中を改めると、五円札が二枚入っていた。私はその金を平生から気の毒に思っていた、或懇意な芸術家に贈ろうかしらと思つて、暗あんに彼の来るのを待ち受けていた。ところがその芸術家がまだ見えない先に、何か寄附の必要ができてきたりして、つい二枚とも消費してしまった。

一口でいうと、この金は私にとってけっして無用なものではなかつたのである。世間の通り相場で、立派に私のために消費されたというよりほかに仕方がないのである。けれどもそれを他ひとにや

ろうとまで思った私の主観から見れば、そんなにありがたみの附着していない金には相違なかったのである。打ち明けた私の心持をいうと、こうした御礼を受けるより受けない時の方がよほど颯さつ爽ぱりしていた。

畔柳芥舟君くろやなぎかいしゆうが樗牛会ちよぎぬつかいの講演の事で見えた時、私は話のついでとして一通りその理由を述べた。

「この場合私は労力を売りに行ったのではない。好意づくで依頼に応じたのだから、向うでも好意だけで私に酬むくいたらよかろうと思う。もし報酬問題とする気なら、最初から御礼はいくらするが、来てくれるかどうかと相談すべきはずでしょう」

その時K君は納得なっとくできないといったような顔をした。そうしてこう答えた。

「しかしどうでしょう。その十円はあなたの労力を買ったという意味でなくって、あなたに対する感謝の意を表する一つ的手段と見たら。そう見る訳には行かないのですか」

「品物なら判然はつきりそう解釈もできるのですが、不幸にも御礼が普通営業的の売買ばいばいに使用する金なのですから、どっちとも取れるので「す」

「どっちとも取れるなら、この際さい善意の方に解釈した方が好くはないでしょうか」

私はもつともだとも思った。しかしまたこう答えた。

「私は御存じの通り原稿料で衣食しているくらいですから、無論富裕とは云えません。しかしどうかこうか、それだけで今日こんにちを過ごして行かれるのです。だから自分の職業以外の事にかけては、なるべく好意的に人のために働いてやりたいという考えを持っていきます。そうしてその好意が先方に通じるのが、私にとっては、何よりも尊たつとい報酬なのです。したがって金などを受けると、私
が人のために働いてやるという余地、——今の私にはこの余地が
また極めて狭いのです。——その貴重な余地を腐蝕ふしょくさせられたよ
うな心持になります」

K君はまだ私の云う事を肯うけがわない様子であつた。私も強情であつた。

「もし岩崎とか三井とかいう大富豪に講演を頼むとした場合に、後から十円の御礼を持って行くでしょうか、あるいは失礼だからと云つて、ただ挨拶あいさつだけにとどめておくでしょうか。私の考ではおそらく金銭は持つて行くまいと思うのですが」

「さあ」といっただけでK君は判然した返事を与えなかつた。私にはまだ云う事が少し残つていた。

「己惚おのぼれかは知りませんが、私の頭は三井岩崎に比くらべるほど富んでいないにしても、一般学生よりはずっと金持に違いないと信じて

います」

「そうですね」とK君は首肯うなずいた。

「もし岩崎や三井に十円の御礼を持って行く事が失礼ならば、私の所へ十円の御礼を持って来るのも失礼でしょう。それもその十円が物質上私の生活に非常な潤沢うるおいを与えるなら、またほかの意味からこの問題を眺める事もできるでしょうが、現に私はそれを他ひとにやろうとまで思ったのだから。——私の現下の経済的生活は、この十円のために、ほとんど目に立つほどの影響を蒙まうらないのだから」

「よく考えて見ましょう」といったK君はにやにや笑いながら

帰って行った。

十六

宅うちの前のだらだら坂を下りると、一間ばかりの小川に渡した橋があつて、その橋向うのすぐ左側に、小さな床屋が見える。私はたった一度そこで髪を刈かつて貰った事がある。

平生は白い金巾かなきんの幕で、硝子戸ガラスどの奥が、往来から見えないようにしてあるので、私はその床屋の土間に立って、鏡の前に座を占めるまで、亭主の顔をまるで知らずにいた。

亭主は私の入ってくるのを見ると、手に持った新聞紙を放り出してすぐ挨拶をした。その時私はどうもどこかで会った事のある男に違ないという気がしてならなかった。それで彼が私の後へ廻って、鉢をちよきちよき鳴らし出した頃を見計らって、こっちから話を持ちかけて見た。すると私の推察通り、彼は昔し寺町の郵便局の傍に店を持って、今と同じように、散髪を渡世としていた事が解った。

「高田の旦那などにもだいぶ御世話になりました」
その高田というのは私の従兄なのだから、私も驚いた。

「へえ高田を知ってるのかい」

「知ってるどころじゃございません。始終徳、徳、って鼻屑ひいにし
て下すったもんです」

彼の言葉遣づかいはこういう職人にしてはむしろ丁寧ていねいな方であっ
た。

「高田も死んだよ」と私がいうと、彼は吃驚びっくりした調子で「ヘッ」
と声を揚あげた。

「いい旦那でしたがね、惜しい事に。いつ頃ごろ御亡おなくなりしま
した」

「なに、つい此間こないださ。今日で二週間になるか、ならないぐらいの
ものだろう」

彼はそれからこの死んだ従兄いとこについて、いろいろ覚えていた事を私に語った末、「考えると早いもんですね旦那、つい昨日きのうの事としつきや思われぬのに、もう二十年近くにもなるんですから」と云った。

「あのそら求友亭きゆうゆうていの横町にいらしてね、……」と亭主はまた言葉ことばを継つぎ足した。

「うん、あの二階のある家うちだろう」

「ええ御二階がありましたっけ。あすこへ御移りになった時なんか、方々ほうぼう様から御祝い物なんかあつて、大變御盛ごさかんでしたがね。それから後あとでしたっけか、行願寺ぎょうがんじの寺内じないへ御引越ひきこえなすつたのは」

この質問は私にも答えられなかった。実はあまり古い事なので、私もつい忘れてしまったのである。

「あの寺内も今じゃ大変変わったようだね。用がないので、それからつい入って見た事もないが」

「変わったの変わらないのってあなた、今じゃまるで待合ばかりでさあ」

私は肴町さかなまちを通るたびに、その寺内へ入る足袋屋たびやの角の細い小路こうじの入口に、ごたごた掲げかかられた四角な軒灯の多いのを知っていた。しかしその数を勘定かんじょうして見るほどの道楽気も起らなかったの
で、つい亭主のいう事には気がつかずにいた。

「なるほどそう云えば誰が袖なんて看板が通りから見えるようだね」

「ええたくさんできましたよ。もっとも変わるはずですね、考えて見ると。もうやがて三十年にもなろうと云うんですから。旦那も御承知の通り、あの時分は芸者屋ったら、寺内にたった一軒しきや無かったもんでさあ。東家あずまやってね。ちようどそら高田の旦那の真向まへむかひでしたらう、東家の御神灯ごじんとうのぶら下がっていたのは」

私はその東家をよく覚えていた。従兄いとこの宅うちのつい向むかなので、両方あのものが出入りではいのたびに、顔を合わせさえすれば挨拶あいさつをし合うぐらいの間柄まじりかたであったから。

その頃従兄の家には、私の二番目の兄がごろごろしていた。この兄は大の放蕩ほうとうもので、よく宅の懸物かけものや刀剣類を盗み出しては、それを二束三文に売り飛ばすという悪い癖くせがあった。彼が何で従兄の家に転ころがり込んでいたのか、その時の私には解らなかつたけれども、今考えると、あるいはそうした乱暴を働らいた結果、しばらく家うちを追い出されていたかも知れないと思う。その兄のほかにも、まだ庄さんという、これも私の母方の従兄に当る男が、そこ

いらにぶらぶらしていた。

こういう連中がいつでも一つ所に落ち合つては、寝そべつたり、縁側へ腰をかけたたりして、勝手な出放題を並べていると、時々向うの芸者屋の竹格子の窓から、「今日は」などと声をかけられたりする。それをまた待ち受けてでもいるごとくに、連中は「おいちよつとおいで、好いものあるから」とか何とか云つて、女を呼び寄せようとする。芸者の方でも昼間は暇だから、三度に一度は御愛嬌に遊びに来る。といった風の調子であつた。

私はその頃まだ十七八だつたらう、その上大変な羞恥屋で通つていたので、そんな所に居合わしても、何にも云わずに黙つて隅

の方に引込んでばかりいた。それでも私は何かの拍子で、これらの人々といっしょに、その芸者屋へ遊びに行つて、トランプをした事がある。負けたものは何か奢らなければならぬので、私は人の買った寿司や菓子等をだいぶ食つた。

一週間ほど経つてから、私はまたこののらくらの兄に連れられて同じ宅へ遊びに行つたら、例の庄さんも席に居合せて話がだいぶはずんだ。その時咲松という若い芸者が私の顔を見て、「またトランプをしましょう」と云つた。私は小倉の袴を穿いて四角張っていたが、懐中には一銭の小遣さえ無かつた。

「僕は銭がないから厭だ」

「好いわ、私が持つてるから」

この女はその時眼を病んででもいたのだらう、こういいいい、綺麗な襦袢の袖でしきりに薄赤くなつた二重瞼を擦っていた。

その後私は「御作が好い御客に引かされた」という噂を、従兄の家で聞いた。従兄の家では、この女の事を咲松と云わないで、常に御作御作と呼んでいたのである。私はその話を聞いた時、心の中でもう御作に会う機会も来ないだらうと考えた。

ところがそれからだいぶ経って、私が例の達人といっしょに、芝の山内の勧工場へ行ったら、そこでまたぱったり御作に出会つた。こちらの書生姿に引き易えて、彼女はもう品の好い奥様に

変っていた。旦那というのも彼女の傍そばについていた。……

私は床屋の亭主の口から出た東家あずまやという芸者屋の名前の奥ひそに潜ひそんでいるこれだけの古い事実を急に思い出したのである。

「あすここにいた御作という女を知ってるかね」と私は亭主に聞いた。

「知ってるどころか、ありや私の姪めいでさあ」

「そうかい」

私は驚ろいた。

「それで、今どこにいるのかね」

「御作は亡なくなりましたよ、旦那」

私はまた驚ろいた。

「いつ」

「いつって、もう昔の事になりますよ。たしかあれが二十三年の年でしたらう」

「へええ」

「しかも浦塩ウラジヲで亡くなったんです。旦那が領事館に關係のある人だったもんですから、あっちへいっしょに行きましてね。それから間もなくでした、死んだのは」

私は帰って硝子戸ガラスドの中に坐って、まだ死なずにいるものは、自分とあの床屋の亭主だけのような気がした。

十八

私の座敷へ通されたある若い女が、「どうも自分の周囲まわりがきちんと片づかないで困りますが、どうしたら宜よろしいものでしょう」と聞いた。

この女はある親戚の宅うちに寄寓きぐうしているので、そこが手狭てせまな上に、子供などが蒼蠅うるせいのだろうと思った私の答は、すこぶる簡単であった。

「どこかさっぱりした家うちを探して下宿でもしたら好いでしょう」「いえ部屋の事ではないので、頭の中がきちんとは片づかないで困

るのです」

私は私の誤解を意識すると同時に、女の意味がまた解らなくなつた。それでももう少し進んだ説明を彼女に求めた。

「外からは何でも頭の中に入って来ますが、それが心の中心と折合がつかないのです」

「あなたのいう心の中心とはいったいどんなものですか」

「どんなものと云つて、まっすぐ真直な直線なのです」

私はこの女の数学に熱心な事を知っていた。けれども心の中心が直線だという意味は無論私に通じなかつた。その上中心とははたして何を意味するのか、それもほとんど不可解であつた。女は

こう云った。

「物には何でも中心がございましょう」

「それは眼で見る事ができ、ものさし尺度で計る事のできる物体についての話でしょう。心にも形があるんですか。そんならその中心というものをここへ出して御覧なさい」

女は出せるとも出せないとも云わずに、庭の方を見たり、ひざ膝の上で両手を擦すつたりしていた。

「あなたの直線というのは比たとえ喩じゃありませんか。もし比喩なら、まる円と云っても四角と云っても、つまり同じ事になるのでは
う」

「そうかも知れませんが、形や色が始終しじゆう変っているうちに、少しも変らないものが、どうしてもあるのです」

「その変わるものと変らないものが、別々だとすると、要するに心が二つある訳になります。それで好いのですか。変わるものはすなわち変らないものでなければならぬはずじゃありませんか」

こう云った私はまた問題を元に返して女に向った。

「すべて外界のものが頭のなかに入って、すぐ整然と秩序なり段落なりがはつきりするようになまる人は、おそろくないでしょう。失礼ながらあなたの年齢としや教育や学問で、そうきちんちんと片づけられる訳がありません。もしまたそんな意味でなくって、学問

の力を借りずに、徹底的にどさりと納まりをつけたいなら、私のようなものの所へ来てても駄目だめです。坊さんの所へでもいらっしやい」

すると女が私の顔を見た。

「私は始めて先生を御見上げ申した時に、先生の心はそういう点で、普通の人以上に整ととのっついていらっしやるように思いました」

「そんなはずがありません」

「でも私にはそう見えませんでした。内臓の位置までが調ととっていらっしやるとしか考えられませんでした」

「もし内臓がそれほど具合よく調節されているなら、こんなに始しじ

終病氣ゆうけいなどはしません」

「私は病氣にはなりません」とその時女は突然自分の事を云つた。

「それはあなたが私より偉い証拠しやうこです」と私も答えた。

女は蒲団ふとんを滑りすべり下りた。そうして、「どうぞ御身体おからだを御大切ごたいせつに」と云つて帰つて行つた。

十九

私の旧宅は今私の住んでいる所から、四五町奥の馬場下という

町にあった。町とは云い条、その実じつ小さな宿場としか思われな
くらしい、小供の時の私には、寂れ切さびきつてかつ淋さむしく見えた。もと
もと馬場下とは高田の馬場の下にあるという意味なのだから、江
戸絵図で見ても、朱引内しゅびきうちか朱引外しゅびきうちか分らない辺鄙へんぴな隅すみの方にあつ
たに違ちがないのである。

それでも内蔵造くらづくりの家うちが狭い町内に三四軒はあつたらう。坂を上あが
ると、右側に見える近江屋伝兵衛おうみやでんべえという薬種屋やくしゅやなどはその一つで
あつた。それから坂を下り切きつた所に、間口の広い小倉屋こくらやという
酒屋もあつた。もつともこの方は倉造りではなかつたけれども、
堀部安兵衛ほりべやすべえが高田の馬場で敵かたきを打つ時に、ここへ立ち寄ますつて、

酒を飲んで行ったという履歴のある家柄であった。私はその話を小供の時分から覚えていたが、ついぞそこにしまつてあるという噂の安兵衛が口を着けた枡を見たことがなかった。その代り娘の御北さんの長唄は何度となく聞いた。私は小供だから上手だか下手だかまるで解らなかったけれども、私の宅の玄関から表へ出る敷石の上に立って、通りへでも行こうとすると、御北さんの声がそこからよく聞こえたのである。春の日の午過などに、私はよく恍惚とした魂を、麗かな光に包みながら、御北さんの御浚いを聴くでもなく聴かぬでもなく、ぼんやり私の家の土蔵の白壁に身を靠たせて、佇立んでいた事がある。その御蔭で私はとうとう「旅

の衣ころもは篠懸すずかけの」などという文句をいつの間にか覚えてしまった。

このほかには棒屋が一軒あった。それから鍛冶屋かじやも一軒あった。少し八幡坂はちまんざかの方へ寄った所には、広い土間を屋根の下に囲い込んだやっちや場ばもあった。私の家のものは、そこの主人を、問とん屋やの仙太郎さんと呼んでいた。仙太郎さんは何でも私の父とごく遠い親類つづきになっているんだとか聞いたが、交際つきあいからいうと、まるで疎濶そかつであった。往来で行き会う時だけ、「好い御天気で」などと声をかけるくらいの間柄あいだがらに過ぎなかつたらしく思われる。この仙太郎さんの一人娘が講釈師の貞水ていすいと好い仲になって、死ぬの生きるのという騒ぎひとぎまのあった事も人間ひとに聞いて覚えてはい

るが、纏まとまった記憶は今頭のどこにも残っていない。小供の私には、それよりか仙太郎さんが高い台の上に腰をかけて、矢立やたてと帳面を持ったまま、「いーやっちやいくら」と威勢の好い声で下に
いる大勢の顔を見渡す光景の方がよっほど面白かった。下からは
また二十本も三十本もの手を一度に挙あげて、みんな仙太郎さんの
方を向きながら、ろんじだのがれんだのという符徴ふちようを、罵ののしるよ
うに呼び上げるうちに、薑しょうがや茄子なすや唐茄子とうの籠かごが、それらの節太ふしぎと
の手で、どしどしどこかへ運び去られるのを見ているのも勇まし
かった。

どんな田舎いなかへ行ってもありがちな豆腐屋とうふやは無論あった。その豆

腐屋には油の臭においの染み込んだ縄暖簾なわのれんがかかっている。門口かどぐちを流れる下水の水が京都へでも行ったように綺麗きれいだった。その豆腐屋について曲ると半町ほど先に西閑寺せいかんじという寺の門が小高く見えた。赤く塗られた門の後うしろは、深い竹藪たけやぶで一面に掩おおわれているので、中になんなものがあるか通りからは全く見えなかったが、その奥でする朝晩の御勤おととめの鉦かねの音ねは、今でも私の耳に残っている。ことに霧きりの多い秋から木枯こがらしの吹く冬へかけて、カンカンと鳴る西閑寺の鉦の音は、いつでも私の心に悲しくて冷つめたい或物を叩たたき込むように小さい私の気分を寒くした。

この豆腐屋の隣に寄席よせが一軒あったのを、私は夢幻ゆめうつのようにまだ覚えている。こんな場末に人寄場ひとよせばのあろうはずがないというのが、私の記憶に霞かすみをかけるせいだろう、私はそれを思い出すたびに、奇異な感じに打たれながら、不思議そうな眼を見張って、遠い私の過去をふり返るのが常である。

その席亭あるじの主人というのは、町内の鳶頭とびがしらで、時々目暗縞めくらじまの腹掛あはせに赤い筋すじの入った印絆纏しるしばんてんを着て、突っかけ草履ぞうりか何かでよく表を歩いていた。そこにまた御藤おふじさんという娘があつて、その人の容きり

色がよく家のものの口に上った事も、まだ私の記憶を離れずにいる。後には養子を貰ったが、それが口髭を生やした立派な男だったので、私はちよつと驚ろかされた。御藤さんの方でも自慢の養子だという評判が高かったが、後から聞いて見ると、この人はどこかの区役所の書記だとかいう話であった。

この養子が来る時分には、もう寄席もやめて、しもうた屋になつていたようであるが、私はその宅の軒先にまだ薄暗い看板が淋しそうに懸つていた頃、よく母から小遣を貰ってそこへ講釈を聞きに出かけたものである。講釈師の名前はたしか、南麟とかいった。不思議な事に、この寄席へは南麟よりほかに誰も出な

かったようである。この男の家はどこにあったか知らないが、どの見当から歩いて来るにしても、道普請ができて、家並の揃った今から見れば大事業に相違なかった。その上客の頭数はいつでも十五か二十くらいなのだから、どんなに想像を逞ましくしても、夢としか考えられないのである。「もうしもうし花魁え、と云われて八ツ橋なんざますえとふり返る、途端に切り込む刃の光」という変な文句は、私がその時分南隣から教わったのか、それとも後になって落語家のやる講釈師の真似から覚えたのか、今では混雑してよく分らない。

当時私の家からまず町らしい町へ出ようとするには、どうして

も人気のない茶畠ちやばたけとか、竹藪たけやぶとかまたは長い田圃路たんぼみちとかを通り抜
けなければならなかった。買物らしい買物はたいてい神楽坂かぐらざかまで
出る例になつていたので、そうした必要に馴ならされた私に、さし
た苦痛のあるはずもなかったが、それでも矢来やらいの坂を上あつて酒井
様の火ひの見櫓みやぐらを通り越して寺町へ出ようという、あの五六町の一
筋道などになると、昼でも陰森いんしんとして、大空が曇ったように始終しじゆう
薄暗うすくろかった。

あの土手の上に二抱ふたかかえも三抱みかかえもあるうという大木が、何本とな
く並んで、その隙間すきま隙間をまた大きな竹藪で塞ふさいでいたのだか
ら、日の目を拝む時間と云ったら、一日のうちにおそらくただの

一刻もなかったのだろう。下町へ行こうと思って、日和下駄などを穿はいて出ようものなら、きつと非道ひどい目にあうにきまつていた。あすこの霜融しもどけは雨よりも雪よりも恐ろしいもののように私の頭に染み込こんでいる。

そのくらい不便な所でも火事の虞おそれはあったものと見えて、やっぱり町の曲り角に高い梯子はしごが立っていた。そうしてその上に古い半鐘も型のごとく釣るしてあった。私はこうしたありのままの昔をよく思い出す。その半鐘のすぐ下にあつた小さな一膳飯屋いちぜんめしやもおのずと眼先に浮かんで来る。縄暖簾なわのれんの隙間からあたたかそうな煮にメの香においが煙けむりと共に往来へ流れ出して、それが夕暮の靄もやに融とけ込ん

で行く趣おもむきなども忘れる事ができない。私が子規のまだ生きているうちに、「半鐘と並んで高き冬木哉かな」という句を作ったのは、実はこの半鐘の記念のためであった。

二十一

私の家に関する私の記憶は、惣そうじてこういう風に鄙ひなびている。そうしてどこかに薄ら寒い憐あわれな影を宿している。だから今生き残っている兄から、つい此間こないだ、うちの姉達あねたちが芝居はに行つた当時の様子を聴いた時には驚ろいたのである。そんな派出はでな暮しをした

昔もあつたのかと思うと、私はいよいよ夢のような心持になるよりほかはない。

その頃の芝居小屋はみんな猿若町さるわかちょうにあつた。電車も俾くゐるもない時分に、高田の馬場の下から浅草の観音様の先まで朝早く行き着くと云うのだから、たいていの事ではなかつたらしい。姉達はみんな夜半よなかに起きて支度したくをした。途中が物騒ぶつそうだといふので、用心のため、下男がきつと供ともをして行ったそうである。

彼らは筑土つくどを下りて、柿の木横町から揚場あげばへ出て、かねてその船宿にあつらえておいた屋根船に乗るのである。私は彼らがいかに予期に充みちた心をもつて、のろのろ砲兵工廠ほつへんじゆうじやうの前から御茶の

水を通り越して柳橋まで漕がれつつ行っただろうと想像する。しかも彼らの道中はけっしてそこで終りを告げる訳に行かないのだから、時間に制限をおかなかつたその昔がなおさら回顧の種になる。

大川へ出た船は、流を溯って吾妻橋を通り抜けて、今戸の有明楼の傍に着けたものだという。姉達はそこから上って芝居茶屋まで歩いて、それからようやく設けの席につくべく、小屋へ送られて行く。設けの席というのは必ず高土間に限られていた。これは彼らの服装なり顔なり、髪飾なりが、一般の眼によく着く便利のいい場所なので、派出所を好む人達が、争って手に入れたがるから

であつた。

幕の間には役者に随ついてゐる男が、どうぞ楽屋へお遊びにいらつしやいまして云つて案内に来る。すると姉達はこの縮緬ちりめんの模様のある着物の上に袴はかまを穿はいた男の後あとに跟ついて、田之助たのすけとか訥升とつしようとかいふ鬮ひいき眞まの役者の部屋へ行つて、扇子せんすに画えなどを描かいて貰かつて帰つてくる。これが彼らの見栄みえだつたのだらう。そうしてその見栄は金の力でなければ買えなかつたのである。

帰りには元来もとた路を同じ舟で揚場まで漕ぎ戻す。無要心むようじんだからと云つて、下男がまた提灯ちようちんを点つけて迎むかへに行く。宅うちへ着くのは今の時計で十二時くらいにはなるのだらう。だから夜半よなかから夜半まで

かかって彼らはようやく芝居を見る事ができたのである。……

こんな華麗な話を聞くと、私ははたしてそれが自分の宅に起つた事か知らんと疑いたくなる。どこか下町の富裕な町家の昔を語られたような気もする。

もつとも私の家も侍分ではなかった。派出な付合をしなればならない名主という町人であった。私の知っている父は、禿頭の爺さんであったが、若い時分には、一中節を習ったり、馴染の女に縮緬の積夜具をしてやったりしたのだそうである。青山に田地があつて、そこから上つて来る米だけでも、家のものが食うには不足がなかつたとか聞いた。現に今生き残っている三番目の兄な

どは、その米を舂く音を始終聞いたと云っている。私の記憶によると、町内のものがみんなして私の家を呼んで、玄関玄関と称えていた。その時分の私には、どういう意味か解らなかったが、今考えると、式台のついた厳めしい玄関付の家は、町内にたった一軒しかなかったからだろうと思う。その式台を上った所に、突棒や、袖搦や刺股や、また古ぼけた馬上提灯などが、並んで懸けてあった昔なら、私でもまだ覚えてる。

この二三年来私はたいてい年に一度くらいの割で病気をする。そうして床とこについてから床を上げるまでに、ほぼ一月ひとつきの日数ひかずを潰つぶしてしまふ。

私の病気と云えば、いつもきまつた胃の故障なので、いざとなると、絶食療法よりほかに手の着けようがなくなる。医者いしやの命令ばかりか、病気の性質そのものが、私にこの絶食を余儀なくさせるのである。だから病み始めより回復期に向つた時の方が、余計瘦やせこけてふらふらする。一カ月以上かかるのもおもにこの衰弱が祟たるからたのように思われる。

私の立居たちいが自由になると、黒枠くろわくのついた摺物すりものが、時々私の机の

上に載せられる。私は運命を苦笑する人のごとく、絹帽シルクハットなどを被かぶって、葬式の供に立つ、俵くわを駆かって斎場さいじょうへ駈かけつける。死んだ人のうちには、御爺さんも御婆さんもあるが、時には私よりも年と齒しが若くって、平生からその健康を誇っていた人も交まじっている。

私は宅へ帰って机の前に坐って、人間の寿命は実に不思議なものだと考える。多病な私はなぜ生き残っているのだろうかと思つて見る。あの人はどういう訳で私より先に死んだのだろうかと思つう。

私としてこういう黙想ふけに耽ふけるのはむしろ当然だといわなければならぬ。けれども自分の位地いちちや、身体からだや、才能や——すべて己おの

れというもののおり所を忘れがちな人間の一人いちにんとして、私は死な
ないのが当り前だと思いつながら暮らしている場合が多い。読経どきやうの
間ですら、焼香の際ですら、死んだ仏のあとに生き残った、この
私という形骸けいがいを、ちつとも不思議と心得ずに澄ましている事が常
である。

或人が私に告げて、「他の死ぬのは当り前のように見えます
が、自分が死ぬという事だけはとても考えられません」と云った
事がある。戦争に出た経験のある男に、「そんなに隊のものが
続々斃たおれるのを見ていながら、自分だけは死なないと思つていら
れますか」と聞いたら、その人は「いられますね。おおかた死ぬ

「までは死なないと思ってるんでしよう」と答えた。それから大学の理科に関係のある人に、飛行機の話^きを聴かされた時に、こんな問答をした覚えもある。

「ああして始終^{しじゆう}落ちたり死んだりしたら、後から乗るものは怖い^{こわ}だろうね。今度はおれの番だという気になりそうなものだが、そうでないかしら」

「ところがそうでないと見えます」

「なぜ」

「なぜって、まるで反対の心理状態に支配されるようになるらしいのです。やっぱりあいつは墜落して死んだが、おれは大丈夫だ

という気になると見えますね」

私も恐らくこういう人の気分で、比較的平気にしていられるの
だろう。それもそのはずである。死ぬまでは誰しも生きているの
だから。

不思議な事に私の寝ている間には、黒枠くろわくの通知がほとんど来な
い。去年の秋にも病気が癒なおった後あとで、三四人の葬儀に列したので
ある。その三四人の中に社の佐藤君も這入はいっていた。私は佐藤君
がある宴会の席で、社から貰もらった銀盃ぎんぱいを持って来て、私に酒を勧すす
めてくれた事を思い出した。その時彼の踊った変な踊もまだ覚え
ている。この元気な崛強くつきやうな人の葬式とむらいに行った私は、彼が死んで私

が生残っているのを、別段の不思議とも思わずにいる時の方が多い。しかし折々考えると、自分の生きている方が不自然のような心持にもなる。そうして運命がわざと私を愚弄ぐろうするのではないかしらと疑いたくなる。

二十三

今私の住んでいる近所に喜久井町きくいちょうという町がある。これは私の生れた所だから、ほかの人よりもよく知っている。けれども私が家を出て、方々漂浪ひょうろうして帰って来た時には、その喜久井町がだい

ぶ広がって、いつの間にか根来ねごろの方まで延びていた。

私に縁故の深いこの町の名は、あまり聞き慣れて育ったせい
か、ちつとも私の過去を誘い出す懐なつかしい響を私に与えてくれな
い。しかし書齋ひとに独り坐って、頬杖ほおづえを突いたまま、流れを下る舟
のように、心を自由に遊ばせておくと、時々私の聯想れんそうが、喜久井
町の四字にぱたりと出会ったなり、そこでしばらくていかい廻し始める
事がある。

この町は江戸と云った昔には、多分存在していなかったものら
しい。江戸が東京に改まった時か、それともずっと後のちになつてか
らか、年代はたしかに分らないが、何でも私の父が拵こしらえたものに

相違ないのである。

私の家の定紋じやうもんが井桁いげたに菊なので、それにちなんだ菊に井戸を使つて、喜久井町としたという話は、父自身の口から聴いたのか、または他のものから教おすわつたのか、何しろ今でもまだ私の耳に残っている。父は名主なぬしがなくなつてから、一時区長という役を勤めていたので、あるいはそんな自由も利きいたかも知れないが、それを誇ほこりにした彼の虚栄心を、今になつて考えて見ると、厭いやな心持は疾とくに消え去つて、ただ微笑したくなるだけである。

父はまだその上に自宅の前から南へ行く時には是非共登らなければならぬ長い坂に、自分の姓の夏目という名をつけた。不幸に

してこれは喜久井町ほど有名にならずに、ただの坂として残っている。しかしこの間、或人が来て、地図でこの辺の名前を調べたら、夏目坂というのがあったと云って話したから、ことによると父の付けた名が今でも役に立っているのかも知れない。

私が早稲田わせだに帰って来たのは、東京を出てから何年ぶりになるだろう。私は今の住居すまいに移る前、家うちを探す目的であったか、また遠足の帰り路であったか、久しぶりで偶然私の旧家の横へ出た。その時表から二階の古瓦ふるがわが少し見えたので、まだ生き残っているのかしらと思ったなり、私はそのまま通り過ぎてしまった。

早稲田に移ってから、私はまたその門前を通って見た。表から

覗くと、何だかもとと変らないような気もしたが、門には思いも寄らない下宿屋の看板が懸っていた。私は昔の早稲田田圃が見たかった。しかしそこはもう町になっていた。私は根来の茶畠と竹藪を一目眺めたかった。しかしその痕迹はどこにも発見する事ができなかった。多分この辺だろうと推測した私の見当は、当たっているのか、外れているのか、それさえ不明であった。

私は茫然として佇立した。なぜ私の家だけが過去の残骸のごとくに存在しているのだろう。私は心のうちで、早くそれが崩れてしまえば好いのにと思った。

「時」は力であった。去年私が高田の方へ散歩したついでに、何

気なくそこを通り過ぎると、私の家は綺麗きれいに取り壊されて、そのあとに新らしい下宿屋が建てられつつあった。その傍そばには質屋もできていた。質屋の前に疎まばらな困かじをして、その中に庭木が少し植えてあった。三本の松は、見る影もなく枝を刈り込まれて、ほとんど畸形きけいじ児いじのようになっていたが、どこか見覚みおぼえのあるような心持を私に起させた。昔むかし「影参差松三本の月夜かな」と咏うたったのは、あるいはこの松の事ではなかったらうかと考えつつ、私はまた家に帰った。

「そんな所に生おい立たって、よく今日こんにちまで無事にすんだものですね」

「まあどうかこうか無事にやって来ました」

私達の使った無事という言葉は、男女なんによの間まに起る恋の波瀾はらんがな
いという意味で、云わば情事の反対を指さしたようなものである
が、私の追窮心ついきゆうしんは簡単なこの一句の答で満足できなかつた。

「よく人が云いますね、菓子屋へ奉公すると、いくら甘いものの
好きな男でも、菓子が厭いやになるって、御彼岸おひがんに御萩おはぎなどを拵こしらえてい
るところを宅うちで見えていても分るじゃありませんか、拵こしらえるもの
は、ただ御萩おしぎを御重おじゆうに詰めるだけで、もうげんなりした顔をして

いるくらいだから。あなたの場合もそんな訳なんですか」

「そういう訳でもないようです。とにかく廿歳はたち少し過ぎまでは平気でいたのですから」

その人はある意味において好男子であった。

「たといあなたが平気でいても、相手が平気でいない場合がないとも限らないじゃありませんか。そんな時には、どうしたって誘さそわれがちになるのが当たり前でしょう」

「今からふり返って見ると、なるほどこういう意味でああいう事をしたのだとか、あんな事を云ったのだとか、いろいろ思い当る事がないでもありません」

「じゃ全く気がつかずにいたのですね」

「まあそうですね。それからこちらで気のついたのも一つありました。しかし私の心はどうしても、その相手に惹きつけられる事ができなかつたのです」

私はそれが話の終りかと思つた。二人の前には正月の膳が据えてあつた。客は少しも酒を飲まないし、私もほとんど盃に手を触れなかつたから、献酬けんしゅうというものは全くなかつた。

「それだけで今日まで経過して来られたのですか」と私は吸物をすすりながら念のために訊いて見た。すると客は突然こんな話を私にして聞かせた。

「まだ使用人であった頃に、ある女と二年ばかり会っていた事があります。相手は無論素人しろうとではないのでした。しかしその女はもういないのです。首を縊くって死んでしまったのです。年は十九でした。十日ばかり会わないでいるうちに死んでしまったのです。その女にはね、旦那だんなが二人あって、双方が意地いぢづくで、身受の金を競せり上げあにかかったのです。それに双方共老妓を味方あにして、こっちへ来い、あっちへ行くなと義理責ぎりせめにもしたらしいのです。

……」

「あなたはそれを救ってやる訳に行かなかったのですか」

「当時の私は丁稚ていぢの少し毛の生はえたようなもので、とてもどうも

できないのです」

「しかしその芸妓げいしやはあなたのために死んだのじゃありませんか」

「さあ……。一度に双方の旦那に義理を立てる訳に行かなかったからかも知れませんが。……。しかし私ら二人の間に、どこへも行かないという約束はあったに違いないのです」

「するとあなたが間接にその女を殺した事になるのかも知れませんかね」

「あるいはそうかも知れません」

「あなたは寢覚ねぞめが悪かありませんか」

「どうも好くないのです」

元日に込み合った私の座敷は、二日になって淋しいくらい静かであった。私はその淋しい春の松の内に、こういう憐れな物語りを、その年賀の客から聞いたのである。客は真面目な正直な人だったから、それを話すにも、ほとんど艶っぽい言葉を使わなかった。

二十五

私がまだ千駄木にいた頃の話だから、年数にすると、もうだいぶ古い事になる。

或日私は切通きりどおしの方へ散歩した歸りに、本郷四丁目の角へ出る代りに、もう一つ手前の細い通りを北へ曲った。その曲り角にはその頃あつた牛屋ぎゅうやの傍そばに、寄席よせの看板がいつでも懸かつていた。

雨の降る日だったので、私は無論傘かさをさしていた。それが鉄御てつお納戸なんどの八間はちけんの深張で、上から洩もつてくる雫しずくが、自然木じねんぼくの柄えを伝わって、私の手を濡ぬらし始めた。人通りの少ないこの小路こうじは、すべての泥を雨で洗い流したように、足駄あしだの齒はに引ひつ懸かる汚きたないものはほとんどなかった。それでも上を見れば暗く、下を見れば佗わびしかつた。始終しじゅう通りつけているせいでもあるうが、私の周囲には何一つ私の眼を惹ひくものは見えなかった。そうして私の心はよ

くこの天気とこの周囲に似ていた。私には私の心を腐蝕ふしよくするよう
な不愉快な塊かたまりが常にあつた。私は陰鬱いんうつな顔をしながら、ぼんやり
雨の降る中を歩いてた。

日蔭町ひかげちようの寄席よせの前まで来た私は、突然一台の幌俵ほろぐるまに出合つた。

私と俵の間には何の隔りへだたもなかつたので、私は遠くからその中に
乗っている人の女だという事に気がついた。まだセルロイドの窓
などのできない時分だから、車上の人は遠くからその白い顔を私
に見せていたのである。

私の眼にはその白い顔が大変美しく映つた。私は雨の中を歩き
ながらじつとその人の姿に見惚みとれていた。同時にこれは芸者だろ

うという推察が、ほとんど事実のように、私の心に働らきかけた。すると俤が私の一間ばかり前へ来た時、突然私の見ていた美しい人が、鄭寧な会釈を私にして通り過ぎた。私は微笑に伴なうその挨拶とともに、相手が、大塚楠緒さんであった事に、始めて気がついた。

次に会ったのはそれから幾日目だったろうか、楠緒さんが私に、「この間は失礼しました」と云ったので、私は私のありのままを話す気になった。

「実はどこの美しくい方かと思って見ていました。芸者じゃないかしらとも考えたのです」

その時楠緒さんが何と答えたか、私はたしかに覚えていないけれども、楠緒さんはちつとも顔を赧あからめなかった。それから不愉快な表情も見せなかった。私の言葉をただそのままに受け取ったらしく思われた。

それからずっと経たって、ある日楠緒さんがわざわざ早稲田へ訪ねて来てくれた事がある。しかるにあいにく私は妻さいと喧嘩けんかをしていた。私は厭いやな顔をしたまま、書斎にじっと坐っていた。楠緒さんは妻と十分ばかり話をして帰って行った。

その日はそれですんだが、ほどなく私は西片町へ詫あやまりに出かけた。

「実は喧嘩をしていたのです。妻も定めて無愛想でしたらう。私はまた苦々しい顔を見せるのも失礼だと思つて、わざと引込んでいたのです」

これに対する楠緒さんの挨拶も、今では遠い過去になつて、もう呼び出す事のできないほど、記憶の底に沈んでしまつた。

楠緒さんが死んだという報知の来たのは、たしか私が胃腸病院にいる頃であつた。死去の広告中に、私の名前を使って差支ないかと電話で問い合わせされた事などもまだ覚えてゐる。私は病院で「ある程の菊投げ入れよ棺の中」という手向の句を楠緒さんのために詠んだ。それを俳句の好きなある男が嬉しがつて、わざわざ

私に頼んで、短冊に書かせて持って行ったのも、もう昔になつてしまつた。

二十六

益ますさんがどうしてそんなに零落おちぶれたものか私には解らない。何しろ私の知っている益さんは郵便脚夫であつた。益さんの弟の庄さちやうんも、家うちを潰つぶして私の所ところへ転ころがり込んで食客いそくになつていたが、これはまだ益さんよりは社会的地位が高かつた。小供の時分本町の鰯屋いわしやへ奉公に行つていた時、浜の西洋人が可愛かわいがつて、外国へ連

れて行くと云ったのを断ったのが、今考えると残念だなどと始終しじゆう話していた。

二人とも私の母方の従兄いとこに当る男だったから、その縁故で、益さんは弟おとうに会うため、また私の父に敬意を表するため、月に一遍ぐらいは、牛込の奥まで煎餅せんべいの袋などを手土産てみやげに持って、よく訪ねて来た。

益さんはその時何でも芝はずの外れか、または品川近くに世帯を持って、一人暮しの呑気のんきな生活を営んでいたらしいので、宅うちへ来るとよく泊まって行った。たまに帰ろうとすると、兄達が寄ってたかって、「帰ると承知しないぞ」などと威嚇おどかしたものである。

当時二番目と三番目の兄は、まだ南校なんこうへ通っていた。南校というのは今の高等商業学校の位置にあつて、そこを卒業すると、開成学校すなわち今日こんにちの大学へ這入はいる組織そしよくになつていたものらしかった。彼らは夜になると、玄関きりに桐の机を並べて、明日あしたの下読したよみをする。下読と云つたところで、今の書生のやるのとはだいぶ違つていた。グードリッチの英国史といつたような本を、一節ぐらいずつ読んで、それからそれを机の上へ伏せて、口の内で今読んだ通りを暗誦あんしやうするのである。

その下読が済むと、だんだん益さんが必要になつて来る。庄さんもいつの間にかそこへ顔を出す。一番目の兄も、機嫌きげんの好い時

は、わざわざ奥から玄関まで出張でばって来る。そうしてみんないっしょになつて、益さんに調戯からかい始める。

「益さん、西洋人の所へ手紙を配達する事もあるだろう」

「そりゃ商売だから厭いやだつて仕方ありません、持って行きますよ」

「益さんは英語ができるのかね」

「英語ができるくらいならこんな真似まねをしちやいません」

「しかし郵便ツとか何とか大きな声を出さなくっちゃならないだろう」

「そりゃ日本語で間に合いますよ。異人だつて、近頃は日本語が

解りますもの」

「へええ、向むかでも何とか云うのかね」

「云いますとも。ペロリの奥さんなんか、あなたよろしいありがとうと、ちゃんと日本語で挨拶あいさつをするくらいです」

みんなは益さんをここまでおびき出しておいて、どっと笑うのである。それからまた「益さん何て云うんだって、その奥さんは」と何遍も一つ事を訊きいては、いつまでも笑いの種にしようと巧たくらんでかかる。益さんもしまいには苦笑いをして、とうとう「あなたよろしい」をやめにしてしまう。すると今度は「じゃ益さん、野中のなかの一本杉いっほんすぎをやって御覧よ」と誰かが云い出す。

「やれっ たっ て、 そうおいそれとやれるもんじゃありません」

「まあ好いから、 おやりよ。 いよいよ野中の一本杉の所まで参りますと……」

益さんはそれでもにやにやして応じない。 私はとうとう益さんの野中の一本杉というものを聴かきずにしまった。 今考えると、それは何でも講釈か人情にんじょうばなしの一節じゃないかしらと思う。

私の成人する頃には益さんももう宅うちへ来なくなった。 おおかた死んだのだろう。 生きていれば何か消息たよりのあるはずである。 しかし死んだにしても、 いつ死んだのか私は知らない。

私は芝居というものに余り親しみが無い。ことに旧劇は解らない。これは古来からその方面で発達して来た演芸上の約束を知らないのので、舞台の上に開展かいてんされる特別の世界に、同化する能力が私に欠けているためだとも思う。しかしそればかりではない。私が旧劇を見て、最も異様に感ずるのは、役者が自然と不自然の間を、どっちつかずにぶらぶら歩いている事である。それが私に、中腰ちゆうこしと云ったような落ちつけない心持を引き起させるのも恐らく理の当然なのだろう。

しかし舞台の上に子供などが出て来て、甲かんの高い声で、憐れあわっ
ぽい事などを云う時には、いかな私でも知らず知らず眼に涙が滲にじ
み出る。そうしてすぐ、ああ騙だまされたなと後悔する。なぜあんな
に安こぼっぽい涙を零したのだろうと思う。

「どう考えても騙されて泣くのは厭いやだ」と私はある人に告げた。
芝居好のその相手は、「それが先生の常態なのでしよう。平生涙
を控ひかえ目めにしているのは、かえってあなたによそゆきじゃありま
せんか」と注意した。

私はその説に不服だったので、いろいろの方面から向むこうを納得すべさ
せようとしているうちに、話題がいつか絵画の方に滑すべって行っ

た。その男はこの間参考品として美術協会に出た若冲じやくちゆうの御物ごぶつを大
変に嬉うれしがって、その評論をどこかの雑誌に載せるとかいう噂うわさで
あつた。私はまたあの鶏の図がすこぶる気に入らなかつたので、
ここでも芝居と同じような議論が二人の間に起つた。

「いったい君に画えを論ずる資格はないはずだ」と私はついに彼を
罵倒ばとうした。するとこの一言いちごんが本もとになつて、彼は芸術一元論を主張
し出した。彼の主意をかいつまんで云うと、すべての芸術は同じ
源みなもとから湧わいて出るのだから、その内の一つさえうんと腹に入れて
おけば、他は自おのずから解し得られる理窟りくつだといふのである。座に
いる人のうちで、彼に同意するものも少なくなかつた。

「じゃ小説を作れば、自然柔道も旨うまくなるかい」と私が笑談じょうだん半分に云った。

「柔道は芸術じゃありませんよ」と相手も笑いながら答えた。

芸術は平等観から出立するのではない。よしそこから出立するにしても、差別観さべつかんに入いって始めて、花が咲くのだから、それを本来の昔へ返せば、絵も彫刻も文章も、すっかり無に帰してしまふ。そこに何で共通のものがあるう。たとい有ったにしたところで、実際の役には立たない。彼我共通の具体的なものなどの発見もできるはずがない。

こうというのがその時の私の論旨ろんしであった。そうしてその論旨は

けっして充分なものではなかった。もっと先方の主張を取り入れて、周到な解釈を下してやる余地はいくらでもあったのである。

しかしその時座にいた一人が、突然私の議論を引き受けて相手に向い出したので、私も面倒だからついそのままにしておいた。

けれども私の代りになったその男というのはだいぶ酔っていた。

それで芸術がどうだの、文芸がどうだのと、しきりに弁ずるけれども、あまり要領を得た事は云わなかった。言葉遣いさえ少しへべれけであった。初めのうちは面白がって笑っていた人達も、ついには黙ってしまった。

「じゃ絶交しよう」などと酔った男がしまいに云い出した。私は

「絶交するなら外でやってくれ、ここでは迷惑だから」と注意した。

「じゃ外へ出て絶交しようか」と酔った男が相手に相談を持ちかけたが、相手が動かないので、とうとうそれぎりになってしまった。

これは今年の元日の出来事である。酔った男はそれからちよいちよい来るが、その時の喧嘩けんかについては一口も云わない。

ある人が私の家の猫を見て、「これは何代目の猫ですか」と訊いた時、私は何気なく「二代目です」と答えたが、あとで考える
と、二代目はもう通り越して、その実三代目になっていた。

初代は宿なしであったにかかわらず、ある意味からして、だいぶ有名になったが、それに引きかえて、二代目の生涯は、主人に
さえ忘れられるくらい、短命だった。私は誰がそれをどこから
貰って来たかよく知らない。しかし手の掌に載せれば載せられる
ような小さい恰好をして、彼がそこいら中這い廻っていた当時
を、私はまだ記憶している。この可憐な動物は、ある朝家のもの
が床を揚げる時、誤って上から踏み殺してしまった。ぐうという

声がしたので、蒲団ふとんの下に潜り込んでこいる彼をすぐ引き出して、相当の手当てあてをしたが、もう間に合わなかった。彼はそれから一日いちにち二日ふつかしてついに死んでしまった。その後あとへ来たのがすなわち真黒な今の猫である。

私はこの黒猫を可愛かわいがっても憎にくがってもいない。猫の方でも宅うちじ中のそのそ歩き廻るだけで、別に私の傍そばへ寄りつこうという好意を現わした事がない。

ある時彼は台所の戸棚とだなへ這入って、鍋なべの中へ落ちた。その鍋の中には胡麻ごまの油がいっぱいあったので、彼の身体からだはコスメチックでも塗りつけたように光り始めた。彼はその光る身体で私の原稿

紙の上に寝たものだから、油がずっと下まで滲み通って私をずいぶんな目に逢わせた。

去年私の病気をする少し前に、彼は突然皮膚病に罹った。顔から額へかけて、毛がだんだん抜けて来る。それをしきりに爪で掻くものだから、瘡蓋がぼろぼろ落ちて、痕が赤裸になる。私はある日食事中この見苦しい様子を眺めて厭な顔をした。

「ああ瘡蓋を零して、もし小供にでも伝染するといけないから、病院へ連れて行って早く療治をしてやるがいい」

私は家のものにこういったが、腹の中では、ことによると病気が病気だから全治しまいとも思った。昔し私の知っている西洋人

が、ある伯爵から好い犬を貰って可愛^{かわい}がっていたところ、いつかこんな皮膚病に悩まされ出したので、気の毒だからと云って、医者に頼んで殺して貰った事を、私はよく覚えていたのである。

「クロロフォームか何かで殺してやった方が、かえって苦痛がなくて仕合せだろう」

私は三四度^{さんよたび}同じ言葉を繰^くり返^{かえ}して見たが、猫がまだ私の思う通りにならないうちに、自分の方が病気でどっと寝てしまった。その間私はついに彼を見る機会をもたなかった。自分の苦痛が直接自分を支配するせいか、彼の病気を考える余裕さえ出なかった。

十月に入^いって、私はようやく起きた。そうして例のごとく黒い

彼を見た。すると不思議な事に、彼の醜い赤裸の皮膚にもとのような黒い毛が生えかかっていた。

「おや癒なるのかしら」

私は退屈な病後の眼を絶えず彼の上に注いでいた。すると私の衰弱がだんだん回復するにつれて、彼の毛もだんだん濃くなってきた。それが平生の通りになると、今度は以前より肥え始めた。

私は自分の病気の経過と彼の病気の経過とを比較して見て、時々そこに何かの因縁いんねんがあるような暗示を受ける。そうしてすぐその後から馬鹿らしいと思つて微笑する。猫の方ではただにやにや鳴くばかりだから、どんな心持でいるのか私にはまるで解らな

い。

二十九

私は両親の晩年になつてできたいわゆる末^{すえ}子^こである。私を生んだ時、母はこんな年^{とし}齒^しをして懐妊するのは面目ないと云つたとかいう話が、今でも折々は繰^くり返^{かえ}されている。

単にそのためばかりでもあるまいが、私の両親は私が生れ落ちると間もなく、私を里にやっってしまった。その里というのは、無論私の記憶に残っているはずがないけれども、成人の後^{のち}聞いて見

ると、何でも古道具の売買を渡世とせいにしていた貧しい夫婦ものであつたらしい。

私はその道具屋の我楽多がらくたといっしよに、小さい筈はずの中に入れられて、毎晩四谷よつやの大通りの夜店に曝さらされていたのである。それがある晩私の姉が何かのついでにそこを通りかかった時見つけて、可哀想かわいそうとでも思ったのだろう、懐ふところへ入れて宅うちへ連れて来たが、私はその夜どうしても寝つかずに、とうとう一晩中泣き続けに泣いたとかいっているので、姉は大いに父から叱しかられたそうである。

私はいつ頃ごろその里から取り戻されたか知らない。しかしじきまたある家へ養子にやられた。それはたしか私の四つの歳であつた

ように思う。私は物心のつく八九歳までそこで成長したが、やがて養家に妙なごたごたが起つたため、再び実家へ戻るような仕儀となつた。

浅草から牛込へ遷うつされた私は、生れた家うちへ歸つたとは気がつかずに、自分の両親をもと通り祖父母とのみ思つていた。そうして相変らず彼らを御爺おじいさん、御婆おばあさんと呼んで毫ちひも怪しまなかつた。向むかでも急に今までの習慣を改めるのが変だと考えたものか、私にそう呼ばれながら澄ました顔をしていた。

私は普通の末すえツ子のようこにけつして両親から可愛かわいがられなかつた。これは私の性質が素直すなおでなかつたためだの、久しく両親に遠

ざかっていたためだの、いろいろの原因から来ていた。とくに父からはむしろ苛酷かこくに取扱とかわれたという記憶がまだ私の頭に残っている。それなのに浅草から牛込へ移された当時の私は、なぜか非常に嬉うれしかった。そうしてその嬉うれしさが誰の目にもつくくらいに著るしく外へ現あらわれた。

馬鹿な私は、本当の両親を爺婆じいばあとのみ思い込んで、どのくらいの月日を空くうに暮らしたものだろう、それを訊きかれるとまるで分らないが、何でも或夜こんな事があつた。

私がひとり座敷に寝ていると、枕元の所で小さな声を出して、しきりに私の名を呼ぶものがある。私は驚ろいて眼を覚さました

が、あたり周囲が真暗まっくらなので、誰がそこに蹲踞うずくまっているのか、ちよつと判断がつかなかった。けれども私は小供だからただじつとして先方の云う事だけを聞いていた。すると聞いているうちに、それが私の家うちの下女の声である事に気がついた。下女は暗い中で私に耳みみこ語すりをするようにこういうのである。――

「あなたが御爺さん御婆さんだと思っ
ていらつしやる方は、本当はあなたの御父おとつさんと御母おつかさんなのですよ。先刻さつきね、おおかたそのせいであんなにこっちの宅うちが好なんだろう、妙なものだな、と云つて二人で話していらつしたのを私が聞いたから、そつとあなたに教えて上げるんですよ。誰にも話しちやいけませんよ。よご

「ごんすか」

私はその時ただ「誰にも云わないよ」と云ったぎりだったが、心の中うちでは大変嬉しかった。そうしてその嬉しさは事実を教えてくれたからの嬉しさではなくって、単に下女が私に親切だったからの嬉しさであった。不思議にも私はそれほど嬉しく思った下女の名も顔もまるで忘れてしまった。覚えているのはただその人の親切だけである。

私がこうして書齋すわに坐すわっていると、来る人の多くが「もう御病おな気はすっかり御癒おりですか」と尋ねてくれる。私は何度も同じ質問を受けながら、何度も返答に躊躇ちゆうした。そうしてその極きよくいつでも同じ言葉を繰くり返かえすようになった。それは「ええまあどうかこうか生きています」という変な挨拶あいさつに異ことならなかった。

どうかこうか生きています。——私はこの一句を久しい間使用した。しかし使用するごとに、何だか不穩ふおん当とうな心持がするので、自分でも実はやめられるならばと思つて考えてみたが、私の健康状態を云い現わすべき適當な言葉は、他たにどうしても見つからなかった。

ある日T君が来たから、この話をして、癒なおったとも云えず、癒らないとも云えず、何と答えて好いか分らないと語ったら、T君はすぐ私にこんな返事をした。

「そりゃ癒ったとは云われませんね。そう時々再発するようじゃ。まあもとの病気の継続なんでしょう」

この継続という言葉聞いた時、私は好い事を教えられたような気がした。それから以後は、「どうかこうか生きています」という挨拶あいさつをやめて、「病気はまだ継続中です」と改ためた。そうしてその継続の意味を説明する場合には、必ず歐洲の大乱を引合ひきあいに出した。

「私はちょうど独乙ドイツが聯合軍れんごうぐんと戦争をしているように、病氣と戦争をしているのです。今こうやってあなたと対坐していられるのは、天下が太平になったからではないので、塹壕げんごうの中に這入はいつて、病氣と睨めにらつくらをしていからです。私の身体からだは乱世です。いつどんな変へんが起らないとも限りません」

或人は私の説明を聞いて、面白そうにははと笑った。或人は黙っていた。また或人は氣の毒らしい顔をした。

客の帰ったあとで私はまた考えた。——継続中のものはおそろく私の病氣ばかりではないだろう。私の説明を聞いて、笑談じょうだんだと思つて笑う人、解らないで黙っている人、同情の念に駆かられて氣

の毒らしい顔をする人、——すべてこれらの人の心の奥には、私の知らない、また自分達さえ気のつかない、継続中のものがいくらでも潜ひそんでいるのではなからうか。もし彼らの胸に響くような大きな音で、それが一度に破裂したら、彼らははたしてどう思うだろう。彼らの記憶はその時もはや彼らに向って何物をも語らないだろう。過去の自覚はとくに消えてしまっているだろう。今と昔とまたその昔の間に何らの因果を認める事のできない彼らは、そういう結果に陥おちいった時、何と自分を解釈して見る気だろう。所しょ詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂弾を、思い思いに抱いだきながら、一人残らず、死という遠い所へ、談笑しつつ歩いて行くので

はなかるうか。ただどんなものを抱だいているのか、他ひとも知らず自分も知らないので、仕合せなんだろう。

私は私の病気が継続であるという事に気がついた時、歐洲の戦争もおそらくいつの世からかの継続だろうと考えた。けれども、それがどこからどう始まって、どう曲折して行くかの問題になると全く無知識なので、継続という言葉解とけない一般の人を、私はかえって羨あやむましく思っている。

私がまだ小学校に行っていた時分に、喜きいちゃんという仲の好い友達があつた。喜いちゃんは今時中町なかつちやうの叔父さんの宅うちにいたので、そう道程みちのりの近くない私の所からは、毎日会いに行く事が出来悪にくかつた。私はおもに自分の方から出かけないで、喜いちゃんの来るのを宅で待っていた。喜いちゃんはいくら私が行かないでも、きつと向うから来るにきまつていた。そうしてその来る所は、私の家の長屋を借りて、紙や筆を売る松さんの許もとであつた。

喜いちゃんには父ちちはは母ははがないようだったが、小供の私には、それがいっこう不思議とも思われなかつた。おそらく訊きいて見た事もなかつたろう。したがって喜いちゃんがなぜ松さんの所へ来るの

か、その訳さえも知らずにいた。これはずっと後で聞いた話であるが、この喜いちゃんの御父さんおとつというのは、昔むかし銀座の役人か何かをしていた時、贖金にせがねを造ったとかいう嫌疑けんぎを受けて、入牢じゆうろうしたまま死んでしまったのだという。それであとに取り残された細君が、喜いちゃんを先夫せんぷの家へ置いたなり、松さんの所へ再縁したのだから、喜いちゃんが時々うみ生の母に会いに来るのは当り前の話であった。

何にも知らない私は、この事情を聞いた時ですら、別段変な感じも起さなかつたくらいだから、喜いちゃんとふざけまわって遊ぶ頃に、彼の境遇などを考えた事はただの一度もなかつた。

喜いちゃんも私も漢学が好きだったので、解りもしない癖くせに、よく文章の議論などをして面白かった。彼はどこから聴いてくるのか、調べてくるのか、よくむずかしい漢籍の名前などを挙げあて、私を驚ろかす事が多かった。

彼はある日私の部屋同様になっっている玄関ふところに上り込んで、懐たしかから二冊つづきの書物を出して見せた。それは確たしかに写本であつた。しかも漢文で綴つづつてあつたように思う。私は喜いちゃんから、その書物を受け取つて、無意味にそこを引ひつ繰返くりかえして見ていた。実は何が何だか私にはさっぱり解らなかつたのである。しかし喜いちゃんは、それを知つてゐるかなどと露骨な事をいう性質たで

はなかつた。

「これは太田南畝おおたなんぼの自筆なんだがね。僕の友達ともだちがそれを売りたい
というので君に見せに来たんだが、買ってやらないか」

私は太田南畝という人を知らなかつた。

「太田南畝っていったい何だい」

「蜀山人しよくさんじんの事さ。有名な蜀山人さ」

無学な私は蜀山人という名前さえまだ知らなかつた。しかし喜
いちゃんにそう云われて見ると、何だか貴重きちゆうの書物らしい気がし
た。

「いくらなら売るのがかい」と訊きいて見た。

「五十銭に売りたいと云うんだがね。どうだろう」

私は考えた。そうして何しろ価値切ねぎって見るのが上策だと思いついた。

「二十五銭なら買っても好い」

「それじゃ二十五銭でも構わないから、買ってやりたまえ」

喜いちちゃんはこう云いつつ私から二十五銭受取っておいて、またしきりにその本の効能を述べ立てた。私には無論その書物が解らないのだから、それほど嬉うれしくもなかったけれども、何しろ損はしないだろうというだけの満足はあった。私はその夜南畝莠言なんぼしゆうげん——たしかそんな名前だと記憶しているが、それを机の上に載せ

て寝た。

三十二

翌日あくるひになると、喜いちゃんがまたぶらりとやって来た。

「君昨日きのう買って貰った本の事だがね」

喜いちゃんはそれだけ云って、私の顔を見ながらぐずぐずしている。私は机の上に乗せてあった書物に眼を注いだ。

「あの本かい。あの本がどうかしたのかい」

「実はあすこの宅うちの阿爺おやじに知れたものだから、阿爺が大変怒って

ね。どうか返して貰って来てくれって僕に頼むんだよ。僕も一遍君に渡したもんだから厭いやだったけれども仕方がないからまた来たのさ」

「本を取りにかい」

「取りにつて訳でもないけれども、もし君の方で差支さしつかえがないなら、返してやってくれないか。何しろ二十五銭じゃ安過ぎるっていうんだから」

この最後の一言いちごんで、私は今まで安く買い得たという満足の裏に、ぼんやり潜ひそんでいた不快、——不善の行為から起る不快——を判然はつきり自覚し始めた。そうして一方では狡猾ずるい私を怒いかると共に、

一方では二十五銭で売った先方を怒った。どうしてこの二つの怒りを同時に和らげたものだろう。私は苦い顔をしてしばらく黙っていた。

私のこの心理状態は、今の私が小供の時の自分を回顧して解剖するのだから、比較的明瞭に描き出されるようなものの、その場合の私にはほとんど解らなかった。私さえただ苦い顔をしたという結果だけしか自覚し得なかったのだから、相手の喜いちちゃんには無論それ以上解るはずがなかった。括弧の中でいふべき事かも知れないが、年齢を取った今日でも、私にはよくこんな現象が起ってくる。それでよく他から誤解される。

喜いちちゃんは私の顔を見て、「二十五銭では本当に安過ぎるんだとさ」と云った。

私はいきなり机の上に載せておいた書物を取って、喜いちちゃんの前に突き出した。

「じゃ返そう」

「どうも失敬した。何しろ安公やすこうの持つてるものではないんだから仕方がない。阿爺おやじの宅うちに昔からあったやつを、そつと売って小遣こづかいにしようって云うんだからね」

私はぷりぷりして何とも答えなかった。喜いちちゃんは袂ふところから二十五銭出して私の前へ置きかけたが、私はそれに手を触れようと

もしなかった。

「その金なら取らないよ」

「なぜ」

「なぜでも取らない」

「そうか。しかしつまらないじゃないか、ただ本だけ返すのは。

本を返すくらいなら二十五銭も取りたまいな」

私はたまらなくなった。

「本は僕のものだよ。いったん買った以上は僕のものにきまつて
るじゃないか」

「そりゃそうに違いない。違いないが向の宅むかひのうちでも困まどってるんだか

ら

「だから返すと云ってるじゃないか。だけど僕は金を取る訳がないんだ」

「そんな解らない事を云わずに、まあ取っておきたまいな」

「僕はやるんだよ。僕の本だけでも、欲しければやろうというんだよ。やるんだから本だけ持ってったら好いじゃないか」

「そうかそんなら、そうしよう」

喜いちちゃんは、とうとう本だけ持って帰った。そうして私は何の意味なしに二十五銭の小遣を取られてしまったのである。

世の中に住む人間の一人として、私は全く孤立して生存する訳に行かない。自然他と交渉の必要がどこからか起ってくる。時候の挨拶、用談、それからもっと込み入った懸合——これらから脱却する事は、いかに枯淡な生活を送っている私にもむずかしいのである。

私は何でも他のいう事を真に受けて、すべて正面から彼らの言語動作を解釈すべきものだろうか。もし私が持つて生れたこの単純な性情に自己を託して顧みないとすると、時々飛んでもない人

から騙だまされる事があるだろう。その結果蔭かげで馬鹿にされたり、冷ひ評やかされたりする。極端な場合には、自分の面前でさえ忍ぶべからざる侮辱を受けないとも限らない。

それでは他はみな擦すれ枯からしの嘘吐うそつきばかりと思つて、始めから相手の言葉に耳も借かさず、心も傾かたむけず、或時はその裏面に潜ひそんでいるらしい反対の意味だけを胸に収めて、それで賢かしこい人だと自分を批評し、またそこに安住の地を見出し得るだろうか。そうすると私は人を誤解しないと限らない。その上恐るべき過失を犯す覚悟を、初手しよてから仮定して、かからなければならぬ。或時は必然の結果として、罪のない他を侮辱するくらいの厚顔を準備して

おかなければ、事が困難になる。

もし私の態度をこの両面のどっちかに片づけようとする、私の心にまた一種の苦悶くもんが起る。私は悪い人を信じたくない。それからまた善いよ人を少しでも傷きずけたくない。そうして私の前に現まわれて来る人は、ことごとく悪人でもなければ、またみんな善人とも思えない。すると私の態度も相手しだいでいろいろに変わって行かなければならないのである。

この変化は誰にでも必要で、また誰でも実行している事だろうと思うが、それがはたして相手にぴたりと合って寸分間違のない微妙な特殊な線の上をあぶなげもなく歩いているだろうか。私の

大いなる疑問は常にそこに蟠わたかまっている。

私の僻ひがみを別にして、私は過去において、多くの人から馬鹿にされたという苦にがい記憶をもっている。同時に、先方の云う事や為する事を、わざと平たく取らずに、暗あんにその人の品性に恥を搔かかしたと同じような解釈をした経験もたくさんありはしまいかと思う。

他ひとに対する私の態度はまず今までの私の経験から来る。それから前後の関係と四囲の状況から出る。最後に、曖あいまい昧な言葉ではあるが、私が天から授かった直覚が何分か働らく。そうして、相手に馬鹿にされたり、また相手を馬鹿にしたり、稀まれには相手に彼相
当な待遇を与えたりしている。

しかし今までの経験というものは、広いようで、その実はなはだ狭い。ある社会の一部分で、何度となく繰り返された経験を、他の一部分へ持って行くと、まるで通用しない事が多い。前後の関係とか四囲の状況とか云ったところで、千差万別なのだから、その応用の区域が限られているばかりか、その実千差万別に思慮を廻らさなければ役に立たなくなる。しかもそれを廻らす時間も、材料も充分給与されていない場合が多い。

それで私はともすると事実あるのだから、またないのだから解らない、極めてあやふやな自分の直覚きわというものを主位に置いて、他を判断したくなる。そうして私の直覚がはたして当たったか当らな

いか、要するに客観的事実によつて、それを確める機会をもたない事が多い。そこにまた私の疑いが始終靄しじゅうもやのようにかかつて、私の心を苦しめている。

もし世の中に全知全能ぜんちぜんのうの神があるならば、私はその神の前に跪ひざまずいて、私に毫髪ごうはつの疑うたがいを挟さむ余地もないほど明らかかな直覚を与えて、私をこの苦悶くもんから解脱げだつせしめん事を祈る。でなければ、この不明な私の前に出て来るすべての人を、玲瓏れいろうとうてつ透徹な正直ものに変化して、私とその人との魂がぴたりと合うような幸福を授けたまわん事を祈る。今の私は馬鹿で人に騙だまされるか、あるいは疑い深くて人を容いれる事ができないか、この両方だけしかないような気

がする。不安で、不透明で、不愉快に充ち^みている。もしそれが生^{しやう}涯^{がい}つづくとするならば、人間とはどんなに不幸なものだろう。

三十四

私が大学にいる頃教えたある文学士が来て、「先生はこの間高等工業で講演をなすったそうですね」というから、「ああやっ
た」と答えると、その男が「何でも解らなかつたようですよ」と
教えてくれた。

それまで自分の云った事について、その方面の掛念^{けねん}をまるで

もっていかなかった私は、彼の言葉を聞くとひとしく、意外の感に打たれた。

「君はどうしてそんな事を知ってるの」

この疑問に対する彼の説明は簡単であった。親戚だか知人だか知らないが、何しろ彼に関係のある或家うちの青年が、その学校に通っていて、当日私の講演を聴いた結果を、何だか解らないという言葉で彼に告げたのである。

「いったいどんな事を講演なすったのですか」

私は席上で、彼のためにまたその講演の梗こまごま※（梗概の意）を繰くり返かえした。

「別にむずかしいとも思えない事だろう君。どうしてそれが解らないかしら」

「解らないでしょう。どうせ解りやしません」

私には断乎だんこたるこの返事がいかにも不思議に聞こえた。しかしそれよりもなお強く私の胸を打ったのは、止よせばよかったという後悔の念であった。告白すると、私はこの学校から何度となく講演を依頼されて、何度となく断ったのである。だからそれを最後に引き受けた時の私の腹には、どうかしてそこに集まる聴衆に、相当の利益を与えたいという希望があった。その希望が、「どうせ解りやしません」という簡単な彼の一言いちごんで、みごとに粉砕ふんさいされ

てしまつて見ると、私はわざわざ浅草まで行く必要がなかったのだと、自分を考えない訳に行かなかつた。

これはもう一二年前の古い話であるが去年の秋またある学校で、どうしても講演をやらなければ義理が悪い事になつて、ついにそこへ行つた時、私はふと私を後悔させた前年を思い出した。

それに私の論じたその時の題目が、若い聴衆の誤解を招きやすい内容を含んでいたので、私は演壇を下りる間際にまぎわこう云つた。――

「多分誤解はないつもりですが、もし私の今御話したうちに、判はっ然きりしないところがあるなら、どうぞ私宅まで来て下さい。できる

だけあなたがたに御納得ごなつとくの行くように説明して上げるつもりですから」

私のこの言葉が、どんな風に反響をもたらすだろうかという予期は、当時の私にはほとんど無かったように思う。しかしそれから四五日経たって、三人の青年が私の書齋に這入はいって来たのは事実である。そのうちの二人は電話で私の都合を聞き合せた。一人は鄭寧ていねいな手紙を書いて、面会の時間を拵こしらえてくれと注文して来た。

私は快こころよくそれらの青年に接した。そうして彼らの来意を確たしかめた。一人の方は私の予想通り、私の講演についての筋道の質問であったが、残る二人の方は、案外にも彼らの友人がその家庭に

対して採^とるべき方針についての疑義を私に訊^きこうとした。したがってこれは私の講演を、どう実社会に応用して好いかという彼らの目前に逼^{せま}った問題を持って来たのである。

私はこれら三人のために、私の云うべき事を云い、説明すべき事を説明したつもりである。それが彼らにどれほどの利益を与えたか、結果からいうとこの私にも分らない。しかしそれだけにしただとところで私には満足なのである。「あなたの講演は解らなかつたそうです」と云われた時よりも遥^{はるか}に満足なのである。

「この稿が新聞に出た二三日あとで、私は高等工業の学生から四五通の手紙を受取った。その人々はみんな私の講演を聴

いたものばかりで、いずれも私がここで述べた失望を打ち消すような事実を、反証として書いて来てくれたのである。だからその手紙はみな好意に充ちて^みいた。なぜ一学生の云った事を、聴衆全体の意見として速断するかなどという詰問的のものは一つもなかった。それで私はここに一言を附加して、私の不明を謝し、併せて^{あわ}私の誤解を正してくれた人々の親切をありがたく思う旨^{むね}を公けにするのである。」

私は小供の時分よく日本橋の瀬戸物町せとものちようにある伊勢本いせもとという寄席よせへ講釈を聴きに行った。今の三越の向側むこうがわにいつでも昼席の看板がかかっている、その角かどを曲ると、寄席はつい小半町行くか行かない右手にあったのである。

この席は夜になると、色物いろものだけしかかけないので、私は昼よりほかに足を踏み込んだ事がなかったけれども、席数からいうと一番多く通かよった所のように思われる。当時私のいた家は無論高田の馬場の下ではなかった。しかしいくら地理の便が良かったからと云って、どうしてあんなに講釈を聴きに行く時間が私にあったものか、今考えるとむしろ不思議なくらいである。

これも今からふり返って遠い過去を眺めるせいでもあろうが、そこは寄席としてはむしろ上品な気分を客に起させるようにできていた。高座こうざの右側みぎわきには帳場格子ちやうばこのような仕切しきりを二方に立て廻して、その中に定連じやうれんの席が設けてあった。それから高座こうざの後うしろが縁側えんがわで、その先がまた庭になっていた。庭には梅の古木ななが斜ななめに井桁いげたの上うへに突き出たりして、窮屈きゆうくつな感じのしないほどの大空が、縁えんから仰あががれるくらいに余分の地面を取り込んでいた。その庭を東に受けて離れ座敷りきざしきのような建物も見えた。

帳場格子ちやうばこのうちにいる連中は、時間が余って使い切れない有福たもとな人達たもとなのだから、みんな相応なな服装ふくそうをして、時々吞気のんきそうたもとに袂たもと

から毛拔けぬきなどを出して根気よく鼻毛を抜いていた。そんな長閑のどかな日には、庭の梅の樹きに鶯うぐいすが来て啼なくような気持もした。

中入なかいりになると、菓子なを箱入のまま茶を売る男が客の間へ配って歩くのがこの席の習慣になっていた。箱は浅い長方形のもので、まず誰でも欲しいと思う人の手の届く所に一つと云った風に都合よく置かれるのである。菓子なの数は一箱に十ぐらいの割だったかと思うが、それを食べただけ食べて、後からその代価を箱の中に入れるのが無言の規約になっていた。私はその頃この習慣を珍らしいもののように興がって眺めていたが、今となって見ると、こうした鷹揚おつようで呑気のんきな気分は、どこの人寄場ひとよせばへ行っても、もう味

わう事ができまいと思うと、それがまた何となく懐なつかしい。

私はそんなおっとり物もの寂さびた空気の中で、古めかしい講釈というものをいろいろの人から聴いたのである。その中には、すと・とこ、のん・のん、ずい・ずい、などという妙な言葉を使う男もいた。これは田たな辺べ南なん竜りゆうと云って、もとはどこかの下足番であったとかいう話である。そのすととこ、のん・のん、ずい・ずいははなはだ有名なものであったが、その意味を理解するものは一人もなかった。彼はただそれを軍勢の押し寄せる形容詞として用いていたらしいのである。

この南竜はとつくの昔に死んでしまった。そのほかのものもた

いていは死んでしまった。その後の様子^ごをまるで知らない私には、その時分私を喜ばせてくれた人のうちで生きているものはたして何人あるのだから全く分らなかった。

ところがいつか美音会の忘年会のあった時、その番組を見たら、吉原の幫間^{たいこまち}の茶番だの何だのが列^{なら}べて書いてあるうちに、私は新富座へ行つて、そはたった一人の当時の旧友を見出した。私は新富座へ行つて、その人を見た。またその声を聞いた。そうして彼の顔も咽喉^{のど}も昔とちつとも変わっていないのに驚ろいた。彼の講釈も全く昔の通りであつた。進歩もしない代りに、退歩もしていなかつた。廿世紀のこの急劇な変化を、自分と自分の周囲に恐ろしく意識しつつあつ

た私は、彼の前に坐りながら、絶えず彼と私とを、心のうちで比較して一種の黙想に耽ふけっていた。

彼というのは馬琴ばきんの事で、昔伊勢本いせもとで南竜の中入前をつとめていた頃には、琴凌きんりょうと呼ばれた若手だったのである。

三十六

私の長兄はまだ大学とまらない前の開成校かいせいこうにいたのだが、肺を患わづらって途中で退学してしまった。私とはだいぶ年齒としが違うので、兄弟としての親しみよりも、大人おとな対小供としての関係の方が、深

く私の頭に浸み込んでいる。ことに怒られた時はそうした感じが強く私を刺戟したように思う。

兄は色の白い鼻筋の通った美しくしい男であった。しかし顔たちから云っても、表情から見ても、どこかに峻しい相を具えていて、むやみに近寄れないと云った風の逼った心持を他に与えた。

兄の在学中には、まだ地方から出て来た貢進生などのいる頃だったので、今の青年には想像のできないような気風が校内のそこここに残っていたらしい。兄は或上級生に艶書をつけられたと云って、私に話した事がある。その上級生というのは、兄などよりもずっと年齒上の男であつたらしい。こんな習慣の行なわれな

い東京で育った彼は、はたしてその文をどう始末したものだろ
う。兄はそれ以後学校の風呂でその男と顔を見合わせるたびに、き
まりの悪い思をして困ったと云っていた。

学校を出た頃の彼は、非常に四角四面で、始終堅苦しく構えて
いたから、父や母も多少彼に気をおく様子が見えた。その上病氣
のせいでもあろうが、常に陰気臭い顔をして、宅にばかり引込ん
でいた。

それがいつとなく融けて来て、人柄が自ずと柔らかになつたと
思うと、彼はよく古渡唐棧の着物に角帯などを締めて、夕方から
宅を外にし始めた。時々は紫色で亀甲型を一面に摺った亀清の団

扇わなどが茶の間に放ほうり出だされるようになった。それだけならまだ
好すいが、彼は長火鉢ながひばちの前へ坐すわったまま、しきりに仮色こわいろを遣つかい出だ
した。しかし宅のものは別段それに頓着とんちやくする様子も見えなかった。
私は無論平気であつた。仮色こわいろと同時に藤八拳とうはちけんも始まつた。しかし
この方ほうは相手あいてが要いるので、そう毎晩は繰くり返かへされなかつたが、何
しろ変へんに無器用な手を上げたり下げたりして、熱心にやっつい
た。相手はおもに三番目の兄が勤めていたようである。私は真面まじ
目めな顔をして、ただ傍観ぼうくわんしているに過ぎなかつた。

この兄はとうとう肺病で死んでしまった。死んだのはたしか明
治二十年だと覚えている。すると葬式も済み、待夜たいやも済んで、ま

ずひとかたづき一片付というところへ一人の女が尋ねて来た。三番目の兄が出て応接して見ると、その女は彼にこんな事を訊きいた。

「兄さんは死ぬまで、奥さんを御持ちになりやしますまいね」

兄は病気のため、生涯しやうがい妻帯しなかった。

「いいえしまいまで独身で暮らしていました」

「それを聞いてやっと安心しました。妾わたくしのようなものは、どうせ旦那だんながなくなっっちゃ生きて行かれないから、仕方ありませんけれども、……」

兄の遺骨の埋うめられた寺の名を教おすわって帰って行ったこの女は、わざわざ甲州から出て来たのであるが、元柳橋の芸者をして

いる頃、兄と関係があったのだという話を、私はその時始めて聞いた。

私は時々この女に会って兄の事などを物語って見たい気がしないでもない。しかし会ったら定めし御婆おばあさんになって、昔とはまるで違った顔をしてはいはしまいかと考える。そうしてその心もその顔同様に皺しわが寄って、からからに乾いてはいはしまいかとも考える。もしそうだとすると、彼女かのんなが今になって兄の弟の私に会うのは、彼女にとってかえって辛いつら悲しい事かも知れない。

私は母の記念のためにここで何か書いておきたいと思うが、あ
いにく私の知っている母は、私の頭に大した材料を遺^{のこ}して行っ
てくれなかった。

母の名は千枝^{ちえ}と聞いた。私は今でもこの千枝という言葉^{なつ}を懐か
しいものの一つに数えている。だから私にはそれがただ私の母だ
けの名前で、けっしてほかの女の名前であってはならないような
気がする。幸いに私はまだ母以外の千枝という女に出会った事
がない。

母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼
び起す彼女の幻像は、記憶の糸をいくら辿^{たど}って行っても、御婆さ

んに見える。晩年に生れた私には、母の水々しい姿を覚えている特権がついに与えられずにしまったのである。

私の知っている母は、常に大きな眼鏡めがねをかけて裁縫しごとをしていた。その眼鏡は鉄縁の古風なもので、球たまの大きさが直径さしわたし二寸以上もあつたように思われる。母はそれをかけたまま、すこし顎あごを襟えり元もとへ引きつけながら、私をじつと見る事がしばしばあつたが、老眼の性質を知らないその頃の私には、それがただ彼女の癖とのみ考えられた。私はこの眼鏡と共に、いつでも母の背景になつていた一間いっけんの襖ふすまを想おもい出だす。古びた張交はりませのうちに、生死事大無常迅速しょうじじだいむじょうじんそく云々と書いた石摺いしずりなども鮮あざやかに眼に浮んで来る。

夏になると母は始終紺無地の紹ろの帷子かたびらを着て、幅の狭い黒縺子くろじゆすの帯を締しめていた。不思議な事に、私の記憶に残っている母の姿は、いつでもこの真夏の服装なりで頭の中に現われるだけなので、それから紺無地の紹の着物と幅の狭い黒縺子の帯を取り除くと、後に残るものはただ彼女の顔ばかりになる。母がかつて縁鼻えんばなへ出て、兄と碁ごを打っていた様子などは、彼ら二人を組み合わせた図ず柄らとして、私の胸に収めてある唯一ゆいいつの記念かたみなのだが、そこでも彼女はやはり同じ帷子かたびらを着て、同じ帯を締しめて坐っているのである。

私はついぞ母の里へ伴たづなれて行かれた覚おぼえがないので、長い間母が

どこから嫁に来たのか知らずに暮らしていた。自分から求めて訊きたがるような好奇心はさらになかった。それでその点もやはりぼんやり霞んで見えるよりほかに仕方がないのだが、母が四ツ谷大番町おおばんまちで生れたという話だけは確かに聞いていた。宅は質屋であつたらしい。蔵が幾戸前いくとまえとかあつたのだと、かつて人から教えられたようにも思うが、何しろその大番町という所を、この年になるまで今だに通つた事のない私のことだから、そんな細かな点はまるで忘れてしまった。たといそれが事実であつたにせよ、私の今もっている母の記念のなかに蔵屋敷などはけっして現われて来ないのである。おおかたその頃にはもう潰れてしまつたのだろ

う。

母が父の所へ嫁にくるまで御殿奉公をしていたという話も臆おぼろげ気に覚えているが、どこの大名の屋敷へ上って、どのくらい長く勤めていたものか、御殿奉公の性質さえよく弁わきまえない今の私には、ただ淡あわい薫かおりを残して消えた香このようなもので、ほとんどとりとめようのない事実である。

しかしそう云えば、私は錦にしき絵えに描かいた御殿女中の羽織はっているような華は美でな総模様の着物を宅の蔵の中で見た事がある。紅絹もみうら裏らを付けたその着物の表には、桜だか梅だかが一面に染め出されて、ところどころに金糸や銀糸の刺ぬ繡いも交まじっていた。これは恐ら

く当時の裨褱かいどりとかいうものなのだろう。しかし母がそれを打ち掛けた姿は、今想像してもまるで眼に浮かばない。私の知っている母は、常に大きな老眼鏡をかけた御婆さんであつたから。

それのみか私はこの美しくしい裨褱ごこがいまきがその後小搔巻ごこがいまきに仕立直されて、その頃宅にできた病人の上に載せられたのを見たくらいだから。

三十八

私が大学で教おすわつたある西洋人が日本を去る時、私は何か餞別せんべつ

を贈ろうと思つて、宅の蔵から高時絵の緋の房の付いた美しい文箱を取り出して来た事も、もう古い昔である。それを父の前へ持つて行つて貰い受けた時の私は、全く何の気もつかなかつたが、今こうして筆を執つて見ると、その文箱も小搔巻に仕立直された紅絹裏の裨襠同様に、若い時分の母の面影を濃かに宿しているように思われてならない。母は生涯父から着物を拵えて貰つた事がないという話だが、はたして拵えて貰わないでもすむくらいな支度をして来たものだろうか。私の心に映るあの紺無地の紹の帷子も、幅の狭い黒縹子の帯も、やはり嫁に来た時からすでに箆の中にあつたものなのだろうか。私は再び母に会つて、万事を

ことごとく口ずから訊きいて見たい。

悪戯いたずらで強情な私は、けっして世間の末すえツ子このように母から甘く取扱かわれなかった。それでも宅中うちぢゆうで一番私を可愛かわいがってくれたものは母だという強い親しみの心が、母に対する私の記憶うちの中には、いつでも籠こもっている。愛憎を別にして考えて見ても、母はたしかに品位のある床ゆかしい婦人に違ちがなかつた。そうして父よりも賢かしこそうに誰の目にも見えた。気むずかしい兄も母だけには畏敬いけいの念を抱いだいていた。

「御母おつかさんは何にも云わなないけれども、どこかに怖こわいところがあ
る」

私は母を評した兄のこの言葉を、暗い遠くの方から明らかに引張出してくる事が今でもできる。しかしそれは水に融けて流れかかった字体を、きつとなつてやつと元の形に返したような際どい私の記憶の断片に過ぎない。そのほかの事になると、私の母はすべて私にとって夢である。途切れ途切れに残っている彼女の面影をいくら丹念に拾い集めても、母の全体はとても髣髴する訳に行かない。その途切途切に残っている昔さえ、半ば以上はもう薄れ過ぎて、しつかりとは掴めない。

或時私は二階へ上つて、たった一人で、昼寝をした事がある。その頃の私は昼寝をすると、よく変なものに襲われがちであつ

た。私の親指が見る間に大きくなって、いつまで経^たっても留^らな
かったり、あるいは仰^あ向^{おむ}きに眺^なめている天井^{てんじょう}がだんだん上^かから下^り
て来て、私の胸^{むね}を抑^{おさ}えついたり、または眼^{まなこ}を開^あいて普段^{ふだん}と変^からな
い周囲^{しゅうい}を現^まに見^みているのに、身^み体^ただけ^だが睡^{すい}魔^まの擒^{とりこ}とな^なって、いく
らもがいても、手足^{てあし}を動^{うご}かす事^{こと}がで^できな^なか^かつたり、後^{あと}で考^{かん}えてさ
え、夢^{ゆめ}だか正^{せい}気^きだか訳^{わけ}の分^わらな^ない場^ば合^あが多^{おほ}かつた。そうしてその
時^{とき}も私^{わたし}はこの変^かなも^{もの}に襲^{おそ}われ^れたのであ^ある。

私^{わたし}はいつどこで犯^ひした罪^{つみ}か知^しらな^ないが、何^{なに}しろ自^じ分^{ぶん}の所^{しょ}有^{ゆう}でな
い金^{かね}銭^{せん}を多^{おほ}額^{がく}に消^{しょう}費^ひしてしま^まつた。それ^{それ}を何^{なに}の目^め的^{てき}で何^{なに}に遣^{つか}つた
のか、その辺^{めづこ}も明^{めい}瞭^{りょう}でな^ないけ^けれども、小^{せう}供^{こう}の私^{わたし}にはと^とて^ても償^{つぐな}う訳^{わけ}

に行かないので、気の狭い私は寝ながら大変苦しみ出した。そうしてしまい大きな声を揚げて下にいる母を呼んだのである。

二階の梯子段は、母の大眼鏡と離す事のできない、生死事大無常迅速云々と書いた石摺の張交にしてある襖の、すぐ後についているので、母は私の声を聞きつけると、すぐ二階へ上って来てくれた。私はそこに立って私を眺めている母に、私の苦しみを話して、どうかして下さいと頼んだ。母はその時微笑しながら、「心配しないで好いよ。御母さんがいくらでも御金を出して上げるから」と云ってくれた。私は大変嬉しかった。それで安心してまたすやすや寝てしまった。

私はこの出来事が、全部夢なのか、または半分だけ本当なのか、今でも疑っている。しかしどうしても私は実際大きな声を出して母に救を求め、母はまた実際の姿を現わして私に慰藉いしやの言葉を与えてくれたとしか考えられない。そうしてその時の母の服装なは、いつも私の眼に映る通り、やはり紺無地こんむじの紹ろの帷子かたびらに幅の狭い黒縹くろじゆす子の帯だったのである。

三十九

今日は日曜なので、小供が学校へ行かないから、下女も気を許

したものと見えて、いつもより遅く起きたようである。それでも私の床を離れたのは七時十五分過であった。顔を洗ってから、例の通り焼麩トーストと牛乳と半熟の鶏卵たまごを食べて、かわや 厠のぼに上ろうとする
と、あいにく肥取こいとりが来ているので、私はしばらく出た事のない裏庭の方へ歩を移した。すると植木屋が物置の中で何か片づけものをしていた。不要の炭俵を重ねた下から威勢の好い火が燃えあがる周囲に、女の子が三人ばかり心持よさそうに煖を取っている様子こが私の注意を惹ひいた。

「そんなに焚火たきびに当ると顔が真黒になるよ」と云ったら、末の子が、「いやあーだ」と答えた。私は石垣の上から遠くに見える屋やね

根瓦ねがわの融とけつくした霜しもに濡ぬれて、朝日にきらつく色を眺めたあと、また家うちの中へ引き返した。

親類の子が来て掃除そうじをしている書斎の整頓するのを待つて、私は机を縁側えんがわに持ち出した。そこで日当りの好い欄干らんかんに身を靠もたせたり、頬杖ほおづえを突いて考えたり、またしばらくはじつと動かずにただ魂を自由に遊ばせておいてみたりした。

軽い風が時々鉢植はちうえの九花蘭きゅうからんの長い葉を動かしてきた。庭木の中で鶯ういすが折々下手な囀なみずりを聴かせた。毎日硝子戸ガラスどの中に坐すわっていた私は、まだ冬だ冬だと思っているうちに、春はいつしか私の心を蕩揺とうりゆうし始めたのである。

私の冥想めいそうはいつまで坐まっていても結晶けつじやうしなかつた。筆をとって書こうとすれば、書く種は無尽蔵にあるような心持もするし、あれにしようか、これにしようかと迷い出すと、もう何を書いてもつまらないのだという呑気のんきな考も起ってきた。しばらくそこで佇たたずんでいるうちに、今度は今まで書いた事が全く無意味のように思われ出した。なぜあんなものを書いたのだろうという矛盾が私を嘲弄ちょうりやうし始めた。ありがたい事に私の神経は静まっていた。この嘲弄ちょうりやうの上に乗ってふわふわと高い冥想めいそうの領分のほに上のぼって行くのが自分には大変な愉快えきになった。自分の馬鹿な性質を、雲の上から見み下ろして笑わらいたくなくなった私は、自分で自分を軽蔑けいべつする気分きぶんに揺ゆられ

ながら、揺籃ようらんの中で眠るねむ小供に過ぎなかつた。

私は今まで他ひとの事と私の事をごちゃごちゃに書いた。他の事を書くときには、なるべく相手の迷惑にならないようにとの掛念けねんがあつた。私の身の上を語る時分には、かえって比較的自由な空気の中に呼吸する事ができた。それでも私はまだ私に対して全く色気を取り除き得る程度に達していなかつた。嘘うそを吐ついて世間を欺あざむくほどの銜気げんきがないにしても、もっと卑いやしい所、もっと悪い所、もっと面目を失するような自分の欠点を、つい発表しずじまつた。聖オーガスチンの懺悔ざんげ、ルソーの懺悔、オピウムイーターの懺悔、——それをいくら辿たどって行つても、本当の事実は人間の力

で叙述できるはずがないと誰かが云った事がある。まして私の書いたものは懺悔ではない。私の罪は、——もしそれを罪と云い得るならば、——すこぶる明るいところからばかり写されていただろう。そこに或人は一種の不快を感じずるかも知れない。しかし自身は今その不快の上に跨またがって、一般の人類をひろく見渡しながら微笑しているのである。今までつまらない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、あたかもそれが他人であったかの感を抱いだきつつ、やはり微笑しているのである。

まだ鶯うぐいすが庭で時々鳴く。春風が折々思い出したように九花蘭きゅうからんの葉を揺うごかしに来る。猫がどこかで痛いたく噛かまれた米噛こめかみを日に曝さらし

て、あたたかそうに眠っている。先刻^{さつき}まで庭で護謨^{ゴム}風船^{ふうせん}を揚げ^あて騒いでいた小供達は、みんな連れ立って活動写真へ行^いってしまっ^たた。家も心もひっそりとしたうちに、私は硝子^{ガラ}戸^{スド}を開け放^{はな}つて、静かな春の光に包まれながら、恍惚^{うっとり}とこの稿を書き終るのである。そうした後で、私はちよつと肱^{ひじ}を曲^まげて、この縁側^{えんがわ}に一眠り眠るつもりである。

(二月十四日)

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ 2016年3月15日 第一期製作

原稿 青空文庫
発行者 佐藤 聖
発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘C室
mail : issatudo@gmail.com
